宇宙と恋のあいだ。

神田春希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宇宙と恋のあいだ。

【Ｎコード】
Ｎ６８５８Ｊ

【作者名】
神田春希

【あらすじ】
宇野（うの）　真宙（まひろ）はこの春、全寮制の高校に入学。
『男らしくありたい』と願う、見た目はかわいい系の男子だが、ただ一つ普通の人と違っていたのは宇宙人の血が混じっていること。
『男らしく』を常に心に留めてはいるものの、ルームメイトの『嫌なやつ』が気になり始めて…

第一話（前書き）

他のサイトで連載中ですが、手直ししながらこちらでも掲載することにしました。
話の大幅な変更は今のところありませんが、話の道筋が変わるような変更があった場合にはお知らせしたいと思います。
手直しが出来次第順にアップしていく予定です。
よろしくお願いします。

第一話

「ふぅ、暑いなぁ」
蒸し蒸しとする電車からやっと降りて、駅のベンチに腰を下ろす。
ペットボトルのお茶を飲んで、少し汗ばんだ額をぬぐった。
まだ四月の初めだというのに、今日の天気はまるで初夏のような雰囲気すらする。
ペットボトルをしまうと、宇野（うの）　真宙（まひろ）は、スポーツバックから一枚の地図を取り出した。
そこには、これから入学する高校と隣接する寮が書いてあった。
「今日から、か」
真宙は一言そう呟くと、ベンチから離れ歩き出した。

「俺は絶対、男の中の男になってやる」
真宙は数年前からそう思っていた。
そのため、わざわざ男子校を選んだのだけれど、そう思うようになったのには、真宙なりの訳があった。
普通の人間に見える真宙だが、実は地球人の父と宇宙人（アルデイシア）の母との混血児である。
宇宙人と言っても、見た目的にも能力的にも地球人と変わらない。
一つ違いを述べるなら「性転換能力」があることだ。
もともとアルデイシアには性別がない。
ただし、皆２０歳前後に訪れる体の成熟期になると、好きになった相手の性別、または肉体的能力に応じ性別ができるのである。
しかし混血児となると話はまた別で、生まれたときから一応の男女の区別があり、地球人と同じように育てられる。
真宙の場合も同じで、男の子として今まで暮らしてきた。
成熟期を迎えても、このまま男として暮らしていく。

そう思っていたのだが、中学校に入ったころから、真宙に漠然とした不安がよぎるようになった。
あまり低くならない声。
さらさらの髪。
高くならない背。
大きい瞳。
下手をするとその辺の女の子より、女の子らしい容姿。
成熟期までこの姿だったら、間違いなく肉体的能力によって女になってしまう。
今まで男として育ってきた真宙にとって、いよいよ漠然とした恐怖が現実のものとなって押しかかってきた。
そこで真宙は、家族から離れ、肉体的にも精神的に独立した『男の中の男』となるべく、全寮制の男子校に入学することにしたのだ。
そして今日、今まさにこれから3年間お世話になる学校を目指し歩き出していた。

第二話

「迷った…」
地図を持ちながら途方にくれる真宙。
きちんと地図を見ながら歩いたはずだが、簡略地図だったこともあり、真宙はすっかり道に迷ってしまった。
辺りは夕方になり、少し薄暗くなってきたこともあってか、人の気配もない。
それもそのはず。真宙が迷い込んだ先は、第一級住宅地だったからだ。
それゆえコンビニなどの店もなく、住民に関係のない車が、抜け道などに使用できないよう考慮された袋小路が多く点在している。
「どうしよう……」
真宙はうなだれ、棒のようになった足をさすりながら、とりあえず公園の入り口に座り込んだ。
実は反対側の入り口には、親切にも住宅地図が掲げてあるのだが、薄暗くなってきたこともあり真宙がそれに気付く筈もなかった。
しばらくすると、辺りはすっかり夜の闇に覆われてしまった。
「俺、何やってんだろ」
真宙の大きな瞳からふいに涙がこぼれた。
不安と情けなさから、涙が次々に溢れてくる。

「おい。何してるんだ?」
不意に真宙の背中から、男の声が聞こえた。
真宙は涙をこすりながら、後ろを振り返ると、そこには背の大きな男が立っていた。
高校生であろうか。
青年はバスケット・ボールを小脇に抱えている。
真宙は安堵の表情を浮かべた。

「あの、俺、道に迷ってしまって…」
変に声が上ずってしまい、いつもより声のトーンが高くなる。
瞳にも涙が残っており、真宙の頬をすっと流れ落ちた。
真宙は急に恥ずかしくなってしまい、俯く。
すると青年は真宙の前にしゃがみこんで言った。
「大丈夫だ」
青年は真宙の頭をくしゃくしゃと撫でた。
さらさらの髪は青年の指に絡むことなく、するりと解ける。
真宙が顔を上げると――暗いので表情の細部までは良く見えなかったが――青年はこちらを気遣っているようにみえた。
「どこに行くんだ？」
青年はやさしく頭を撫でながら真宙に聞く。
「あの、橘が丘付属第二高等学校の橘寮って所なんですけど…」
真宙は涙をこすりながら、青年を見上げて言った。
夜の闇で真宙からは見えなかったが、青年は少し驚いたそぶりを見せた。
「…こっちだ」
真宙のスポーツバックを軽々と持ち上げると、そのまま青年は真宙の手をとり歩いていく。
「あ、あの！
荷物くらい自分でもてますからっ！」
慌てて真宙は言うが、青年は何も言わず手を繋いだまま進んでいく。
くねくねとした道を5分くらい歩いただろうか。
角を曲がると急に古びたレンガ造りの塀が現れて、『橘が丘付属第二高等学校　橘寮』という表札が目に飛び込んできた。
「ついたぜ」
青年はやっと手を離した。
先ほどまで繋いでいた手が、じんじんとする。
真宙はその左手を、右の手でさすりながら橘寮を眺めた。

（ここが、これから俺が住む所か…）
寮の壁にはにはツタが絡みつき、もう少しで橘寮と書かれている表札さえ覆ってしまいそうな勢いだ。
「わざわざありがとうございます……あれ？　」
真宙はお礼を口にしたが、もうそこには先ほどの青年の姿はなかった。
「忙しかったのかな……」
そう呟くと、先ほどまで青年に掴まれていた手をぼんやりと眺めた。

第三話

橘寮に入ると、ふくよかな寮母のおばさんが出迎えてくれた。
とても柔和な笑顔だ。
「こんなに遅くなって…心配したのよ」と言われ、真宙は恥ずかしくなり頭を掻く。
『寮生の心得』なる小冊子を貰い、簡単に寮の中の案内をしてもらった。
寮母さんの話によると『家のように快適に過ごせる寮』がモットーらしく、部屋には小さいながらも風呂とトイレが設置されているらしい。

「一つの部屋に2人が基本よ。
同じ学年の子が入ることになっているわ。
宇野くんと相部屋になるのは、山田清盛(やまだ きよもり)くんって言うのよ。
仲良くなるといいわね。
そうそう。おなか空いたでしょ？荷物を置いたら、食堂にいらっしゃいね」
まるで弾丸のように喋ると、寮母さんは真宙に鍵を渡しさっさと行ってしまった。

『２０４号室』
寮母さんからもらった鍵を使って中に入る。
もっと小さい部屋かと思っていたが、二人どころか3～4人くらい入ってもまだ余裕があるように思えた。
「すげー」
真宙は感嘆の声を上げた。
まるでホテルのスイートルームだ。
部屋には机と広めのベッドが二つづつあり、先ほど寮母さんが言

っていたルームメイトの『山田くん』の私物であろう物が置かれている。
その『山田君』は部屋備え付けの風呂に入っているらしく、バスルームから水の音が聞こえた。

「俺はこっちか」
真宙はあいているほうの机にスポーツバックを置くと、ベッドに倒れこむ。
「ふかふかだ」
寮母さんが干していてくれたのだろうか。
布団に埋もれると、太陽の匂いがした。
(山田君が上がったら、きちんと挨拶しないとな)
少し休憩するつもりだった真宙だが、疲れもあったのであろう、いつしか心地のよい眠りについてしまった。

がちゃり

風呂のドアが開き、バスタオルを巻いた青年が湯気と共に出てきた。
ごしごしとタオルで髪を拭き、自分のベッドに腰を下ろす。
ふと、向かいのベッドに目をやると、青年は驚きの表情を見せた。
「さっきの女……？」
青年は真宙の顔をまじまじと見る。
長いまつ毛、透き通るような肌、さらさらの髪。
青年――山田清盛(やまだきよもり)は真宙を女の子だと思っていた。
外が暗かったせいもある。
が、一番は真宙の容姿のせいであろう。

公園で出会ったとき、橘寮に行きたいと聞いて清盛は真宙が寮に住んでいる人の彼女だろうと推測した。

しかしそろそろ門限になるし、第一橘寮は女人禁制とある。
寮生の誰かに合うにしても、自分がいると何かと邪魔になるだろうと思い、彼女を門の前まで連れてくると、何も言わずにその場を去ったのだ。

「まさか、俺のルームメイトなのか？」
ぽつりと呟く清盛。
すると、先ほどまで規則正しいリズムで聞こえていた寝息が、急に乱れる。
真宙の顔を覗き込むと、やや苦しそうな表情を浮かべていた。
「宇野？」
清盛は寮母から聞いた、ルームメイトの名前を口にする。
「――――っ」
よく聞き取れないが、真宙は何か呟いた。
そして、涙がこぼれる。
清盛はおもわず、その零れ落ちる涙を自分の指で拭っていた。

真宙は、いやな夢を見ていた。
不安が駆り立てられるような夢だ。
黒い不安が自分を飲み込む。
どんなにやめてと叫んでも、なぜか声が出せない。
手足の自由も利かず、真宙はただ涙を流すことしか出来ない。

ふわり。

黒いものに包まれていた真宙は、急に優しい感触を覚える。
安らぎにも似たそれは、真宙の頬を優しく撫でているようだ。
少し動くようになった両手で、真宙はそれを掴んだ。
暖かいそれに触れたとき、真宙はいつの間にか、黒いものから解

放されていた。
真宙はそれを自分の胸のほうに持っていき、ぎゅっと抱きしめる。
「――おい」
急に耳元で誰かの声がし、真宙はびっくりして目を開けた。
「え――――？」
真宙の目の前に、清盛が居る。
あと数センチで唇が触れてしまいそうなほどだ。
なぜそのような状況になっているかわからず、真宙は大きい瞳をさらに大きく見開いた。
「手、離せよ」
そう言われて、やっと自分が彼の腕を抱きしめていたことに気がつく。
「うあっ」
素っ頓狂な声を上げて、真宙は手を離した。
清盛は抱きしめられていた腕をちらりと見るとおもむろに立ち上がり、髪をタオルで拭き始めた。
まだなにが起こったのか理解できていない真宙だったが、清盛がバスタオル一枚だったことに気がつき、すでに赤らんでいた顔をますます赤らめた。
「ごごごごごっ――ごめんなさい！」
あたふたとする真宙を見て、清盛は「べつに」とだけ呟やき、服を着る。
着替え終わった清盛は真宙を見た。

かわいそうに彼は、俯いたまま耳まで赤くして縮こまっている。
「おい。飯まだだろ？いくぞ」
清盛は真宙の答えも聞かず、彼の細い手首を掴み歩いていく。
これは清盛なりの真宙への気遣いだったのだが、真宙はますます恥ずかしくてたまらなくなった。

第四話

（何食べたっけ？何にも覚えてないよ――）
食事中、二言三言話をし、道案内をしてくれたのが清盛だとわかった。
真宙は御礼を言ったが、その後話は続かず、ギクシャクとした雰囲気は残ったままだった。
食堂で食事を終え、部屋に帰ってきた二人だったが、清盛は真宙のことなど気にもしていないのか、さっさと自分のベッドに腰を下ろし、ぺらぺらと雑誌をめくっている。
真宙は自分の荷物を整理しようとするも、先ほどのことが気になって、つい清盛を見つめてしまう。

（あいつ、なんだよ。なんで何も言わないんだ？）
そう思っていると、清盛が真宙に目をやった。
「なんだ？」
心地のよい低音。
真宙は少しどきりとする。
「――っ！なんだ？じゃないだろ？
さっきのアレ……なんなんだよ」
出だしの声は勢いよかったが、途中で言葉が小さくなっていき、それと比例するかのように真宙の顔は赤くなった。
「アレ？……あぁ」
清盛は意地悪そうな笑みを浮かべて言う。
「お前が急に手を引っ張るからだろ？――別にお前に手をだそうと思ったわけじゃないぜ。
それとも――出してほしかったのか？」
「このっ！」

意地悪く笑う清盛に真宙はかっとなり、飛び掛った。
しかし、気持ちとは裏腹に、歩きすぎて疲れきった足は言うことを聞かず、もつれる。

（ぶつかる！！）
真宙は目をぎゅっと瞑った。
（――――あれ……痛くない？　でも、なんだ？　）
そっと、目を開けてみる真宙。

真宙は勢いよく倒れこんだが、清盛が真宙の華奢な両肩を支えてくれたお陰で怪我をせずに済んだ。
しかし勢いが良すぎたせいで清盛も巻き込まれた形になり、彼は真宙ごと後ろへ倒れた。
柔らかいベッドがなければ、彼のほうが怪我をしていたことだろう。
そしてその光景は一見すると、真宙がベッドに清盛を押し倒しているようにも見えた。

「――って！！」
真宙は目を白黒させながら、清盛から離れようとしたが、慌てすぎたせいでバランスを崩してしまい、軽く清盛の唇に触れる。

「なななななななっ　なんなんだよっ」
真宙は起き上がるや否や、自分の唇を乱暴に腕でごしごしとこすった。
自分が悪いのはわかってる。
清盛が真宙を支えてくれたから怪我をしなかったことは理解できているが、そう叫ばずにはいられなかった。

（今の『キス』じゃないよな。ちがうよな。不慮の事故だよな？！）

清盛は体を起こし、驚きの表情を浮かべながら唇に手をやる。
「今、今の違うからな！　事故だからな！」
それだけ言うと真宙は「もう寝る！」と叫んで、布団にもぐった。

頭の中がぐちゃぐちゃだ。
（――ファーストキスだったのに――）
悔しさと恥ずかしさで涙が止め処なく溢れてきた。

第五話

その翌日、清盛は真宙と普通に接してくれた。
まるで何事もなかったかの様に。
真宙は3日ほどギクシャクとしていたが、徐々にそのぎこちなさもほぐれてきた。
それと同時に清盛に対して、何かもやもやとした感情を抱いているのに気づく。
彼のことを考えると、何か落ち着かない。
自問自答してみるものの、答えは見つからなかった。

「まぁ　いいや」

腕を伸ばし背伸びをすると、ちょうど部屋の戸がノックされた。
「清盛と真宙いる？」
声の主は桜井（さくらい）　司（つかさ）。
ここ、橘寮の寮長でもあり、生徒会で副会長を務めている二年生である。
清盛とはまた別のタイプの好青年で、背も高くすらりと伸びた手足、少し長めのストレートの髪。
華奢なフレームの眼鏡がとてもよく似合っていた。
「あ、先輩。おはようございます。
山田は――朝トレに行ったみたいです。」
ドアを開けながら真宙は答える。

清盛は体を鍛えることが日課になっているらしく、朝と夕に軽くトレーニングをしている。
真宙と始めてあったのも、その日課のトレーニングの帰りであり、あの公園が清盛のトレーニングスポットだと真宙は最近知った。

「じゃあ、清盛にも伝えておいて。
今日の夕食時にささやかな歓迎会を開くので、そのつもりで来てねって」
桜井先輩はにこりと微笑むと「じゃあよろしく」と言って部屋を出て行った。

（俺が目指す男って、やっぱ桜井先輩みたいな感じなんだよな――）

その時ふと真宙の脳裏に清盛の顔が浮かぶ。

（！っ　や、山田？！　なんで俺山田のことなんか思い出してんだよ！
……確かにちょっとカッコいいけどさ……でも、なんか意地悪そうだし、何考えてるか分かんねーし。
――と、とにかく俺は桜井先輩みたいな男になりてーんだって！）

「何、百面相してんだ？」
真宙の顔をのぞき込む清盛。
桜井と入れ違いに部屋に帰ってきていたのだが、真宙は全く気が付かなかった為、不意を付かれ驚きのあまり固まる。

「あれ、お前――」
清盛はそう言いかけると、真宙の柔らかい前髪を上げた。
すると流れるような動きで、真宙の顔に近づく。
「っ！！」
真宙は驚きのあまり、身動きすら出来ない。
（まさか……キス？！）
目をぎゅっと瞑る真宙。
そして――おでこに冷たい感触を感じた。

（お、おでこ……か……じゃなくてっ）

「な、なにやってんだよ！　」

清盛の胸の辺りを、両腕で押し返す。

真宙はかっと耳まで赤くなった。

部屋を飛び出そうとする真宙だったが、ドアの前で一度止まると、振り向きもせず抑揚のない声で言う。

「桜井先輩が今日の夕方歓迎会をするって言ってた。お前に知らせろって」

それだけを言うと、清盛の返事も聞かずに真宙はさっと部屋を出て行った。

「ふぅ」

真宙は寮の中庭のベンチに腰をかけた。

まだ清盛の冷たいおでこの感覚が残っている。

「俺は、何やってんだ……　」

気分を落ち着かせようと、近くにある自動販売機に向かう。

お茶の入ったペットボトルを買うと、清盛の感触が残るおでこにぴたりとつけた。

ひんやりとした感触が気持ちいい。

冷静に考えてみると、清盛はぼんやりしている自分を見て、具合が悪そうに見えたのかもしれない。

――そう考えると辻褄が合う。

（でも、山田に会うのも、まして謝ることなんて――）

自分のあまりの考えなさの行動に、真宙はがっくりとうなだれ、

頭をかく。

結局、暇をもてあました真宙は寮周辺をあちこち見て回ることにした。

部屋に帰ったのは、歓迎会が始まる少し前だった。

第六話

真宙が部屋に帰ると、清盛が髪の毛をごしごしとタオルで拭いているところだった。
夕方のトレーニングが終わって、風呂に入った後のようだ。

「さっきは驚かせてすまなかったな」
真宙がどう話を切り出そうかと思っていると、清盛のほうから話しかけてきた。
「いや……ぼーっとしてた俺も悪かったし……」
真宙は、ばつが悪そうにもごもごと言う。
清盛が口を開き何かを言おうとしたその時、軽快な鉄琴のメロディーが鳴り響き
『これから、カフェテリアで新入生歓迎会を行います』と言うアナウンスが流れた。

「あ……お、俺、先に行ってるから、山田は髪乾かしてからこいよ」
そう言うと、真宙はさっさとカフェテリアに向かった。

（なにドキドキしちゃってんだよ。俺……。
……やっぱ、なんか変だよなぁ――）
真宙は少し赤い顔を隠すように、少し俯きながらカフェテリアの扉を開けた。

早めに出れば、清盛の近くにならないだろうと思っていた真宙だったが、その思いはカフェテリアについた途端、無残にも散った。
部屋番号と名前がご丁寧にも座席に貼ってあったからだ。
仕方なく真宙は、自分の名前が貼られてある席に座る。

横の席に貼ってある山田の名前が憎らしい。
そんなことを思っていると、後ろの青年から声を掛けられた。
「こんばんは」
彼の名前を見ると、小林健文（こばやしたけふみ）と書いてある。
自分の部屋の隣、２０５号室の学生だ。
「こんばんは」
真宙は挨拶をし、小林を見た。
健康そうに焼けた肌は小麦色で、短い黒い髪。
爽やかな青年だ。

「俺一人部屋だから、ちょっとこの歓迎会楽しみにしてたんだ」
そう言うと小林は自分が中学の時サッカー部だったこと、高校に入ってもサッカー部に入ろうと思っていること、故郷に彼女が居ることなどを話した。

橘寮は、この学校ができた当初からある古い寮であり、その当時は全寮制ではなかったことから部屋数は少ない。
三階建てで、各階５部屋づつある。
学生の部屋以外は、寮母の部屋と大浴場が一階、カフェテリアが二階、食堂が三階にある。
全寮制になるにあたって、柊寮（ひいらぎりょう）、柳寮（なぎりょう）、欅寮（けやきりょう）、の計３寮を新たに建築したのだ。

真宙と小林が話をしていると、清盛が席に座った。
小林は「これからよろしく」と清盛に挨拶をする。
彼のおかげで清盛との間にあった気まずい雰囲気が解消されたのを感じて、真宙は一人ほっとした。

それから程なくして歓迎会は始まった。
司会者に促され、一年生から自己紹介などのお決まりの挨拶をす

る。
真宙は気がつかなかったが、真宙の自己紹介のとき少しざわめいたのを清盛は聞き逃さなかった。
その後、『活動紹介』ということで、部活の紹介が行われた。
他の寮からも応援がきており、各々の部が新入部員獲得のため工夫を凝らした出し物が生徒達の目を楽しませる。
その後は親睦を深めるためのゲームが執り行われた。

（あれ？　）
真宙は違和感を覚えた。
（……立ちくらみ……？　）
急に世界がぐらぐらと回っているように見える。
真宙は立っていられなくなり、ふっと倒れた。
「宇野！　」
真宙の異変に清盛は気づき、倒れる真宙を抱きかかえた。
カフェテリアがざわめき、寮監の桜井が慌ててやって来る。
「真宙くん、どうしたの？　」
桜井が心配そうに真宙を覗き込む。
「朝からちょっと熱があったみたいで……たぶん無理してたんだと思います。
すみませんが、抜けさせていただきます」
清盛はそう言うと真宙を軽々と抱き上げ、カフェテリアを後にした。

真宙をベッドに寝かせると清盛はおでこに触れる。
――熱い。
「やっぱりな……」
清盛は少し眉間にしわを寄せ、真宙の髪をそっと撫でた。

朝、トレーニングから帰ってくると、真宙が少し赤い顔でぼーっとしていた。
よく見ると指先までもが少し赤い。
（熱があるのか？　）
そう思っておでこをくっつけてみると、やはり熱い。
「お前、熱があるぞ」そう言おうと思ったが、真宙を驚かせてしまったみたいで、彼は逃げるように部屋を出て行った。
夕方、戻ってきたときにも言おうと思ったのだが、やはり彼は逃げるように部屋を出て行ったのだ。
そのため、熱があることを言えなかったのだが、肩で息をしている真宙を見て、清盛はそのことを後悔していた。

コンコン

不意にドアをノックする音が聞こえる。
清盛がドアを開けると、桜井が立っていた。
「これ、真宙君に――」
手には氷枕と氷のうがある。
「ありがとうございます」
清盛が礼を言うと、桜井はふわりと微笑んだ。
そして小さな声で清盛に言う。
「君は――気づいていたと思うけど、真宙君にとってここは危険な場所なのかもしれない――」
清盛は何も言わずに頷く。
先ほどの自己紹介の時、自分が感じたものを、桜井も感じていたのだと清盛は思ったからだ。
桜井はニコニコとした顔で、しかし声に鋭さをもって続ける。
「俺も彼を気に入っていてね。だから――何事もないように守ってあげて欲しい。

――どうかな？」
「そのつもりです」
清盛は短く答える。
その言葉を聞いて、桜井は柔和な笑みを浮かべると「それじゃあ、真宙君によろしく」と言って去って行った。

第七話

桜井が居なくなって、少ししてから小林が来た。
「夕食、二人分持ってきたんだけど……宇野大丈夫か？」
心配そうに真宙を覗き込む。
肩で息をしている真宙を見て「苦しそうだな」と小林は呟いた。
食事を机に置くと、寮母さんに貰ったという、薬や体温計などを清盛に渡す。
「宇野が目を覚ましたら飲ましてやって」
小林はそう言うと、真宙を起こさないようにそっと部屋を出て行った。

清盛は真宙のシャツのボタンをそっとはずす。
彼の体は熱のため、しっとりと汗ばんでいた。
清盛はタオルで汗を拭き取ると、体温計を取り出し真宙の熱を測る。

――３９．８度

汗でぐっしょりと濡れた服を着替えさせたほうがいいか、と思案していたその時。
「んん……」
真宙はうっすらと目を開けた。
「大丈夫か？　」
「あれ……？俺、どうして……」
熱で潤んだ瞳を、ぱちぱちと瞬きさせる。
「お前、歓迎会のとき倒れたんだぞ」

心配そうに真宙の顔を覗き込みながら清盛は続ける。
「汗がすごいから、着替えたほうがいいと思うが……着替えできるか？」
真宙は起き上がろうとするが、なぜか体の自由が利かない。
「――体が動かねぇ――」
視界がぐらぐらと揺れて、まるで嵐の中の小船に乗っているようだ。
「着替え……させるからな」
清盛の声がやけに遠くに聞こえる。

真宙は清盛に抱き起こされた。
清盛は手際よく服を脱がせると、暖かいタオルで丁寧に汗をふき取る。
「ふぅ――」
べたべたとまとわり付いていた汗を拭かれて、真宙は思わず声を出した。
「さっぱりしたか？」
清盛はいつの間にか、真宙をパジャマに着替えさせていた。
「うん――ありがと……」
赤い顔をしてふらふらとしながら、真宙は礼を言った。
「飯、食えるか？」
「ん――無理、かも」
熱のせいで、真宙は少し口がもつれた。
「とりあえず、これを飲め」
清盛は水と薬を真宙に手渡す。
真宙は「うん」と小さい声で言うと、おとなしく薬を飲んだ。

こくん　こくん

真宙の水を飲む音が小さく聞こえる。

清盛は薬を飲んだのを確認すると、真宙をベッドに寝かせた。
「あ……ありがと」
そう言うと、真宙は目を瞑り、まどろみの中に身を投じる。

しばらくして、真宙の規則正しい寝息が聞こえてきた。
もう肩で息をしておらず、顔も穏やかだ。
（まったく、心配させやがって）
そう思いながら、真宙の顔を見る清盛。
彼は真宙を見ながら、病弱な妹を思い出していた。

清盛の妹、茜（あかね）はよく熱を出す子供だった。
両親は共働きであったため、茜の世話はもっぱら清盛がすることになっており、全寮制の高校に進学するかどうか最後まで悩んだのは茜の心配があったからだ。
この高校へ進学を決めたのは、「お兄ちゃんがその高校に入るの、すごく楽しみなんだよ」と言った茜の一言による。
もっとも、この高校は特待生には全額学費が免除という話もあったので、両親も強く勧めていたこともあるが。

ばさっ

何かが落ちる音がして、清盛は振り向いた。
真宙は暑いのか、布団や毛布を蹴飛ばしており、半分くらいが床に落ちている。
かろうじておなかに掛かってはいるが、それが落ちるのも時間の問題だ。
清盛はそっと真宙に布団を掛けてやる。
すると、真宙は無意識のうちに清盛の大きい手を掴み、自分の口のほうへ近づけた。

「――いかないで」
清盛にはそう聞こえた。
彼は真宙に掴まれた手をそのままに、床にしゃがみこむと、空いているほうの手で真宙の頭を撫でる。
少し濡れた髪の毛が指に絡んだ。
そして――清盛は真宙の頬に優しくキスをした。

第八話

（……えーっと……）

真宙は身じろぎもせず、この今自分が置かれている状況について考えた。

夕方、視界がぐらぐらと揺れていたとこから、まるで記憶がない。

おでこには氷のう、枕は氷まくら――熱でも出ていたのだろうかと、ここまでは真宙も推測できる。

しかしこの状況、何があったのだろうかと思いあぐねていた。

先ほど真宙は目を覚ました。

夜中の二時を少し過ぎたところだ。

真宙は左の手に違和感を感じて、何気なく左手を動かそうとするが、なぜか動かない。

不思議に思って見ると、清盛の寝顔がそこにあった。

「お、おい……」

真宙は小さく清盛に声をかけるが、まったく目覚める気配はなかった。

左手は真宙の左手と繋がっており、なぜか指と指が絡まりあっている。

まるで恋人たちのそれのように――

（こ、恋人！？）

自分の考えに驚き、真宙は飛び起きた。

すると自然に、繋がっていた手が引っ張られ、清盛が目を覚ます。

真宙が口をパクパクしながら、清盛を見る。

清盛はふぁっと生あくびをして、真宙の顔を見た。

「具合、良くなったか？」
清盛の静かな声に、真宙は背筋がぞくぞくとするのを感じた。
「具合は……うん。でも、あの、これ……は？」
しどろもどろになりながら、真宙は左手を見る。
「あぁ、お前が急に繋いできたんだ。
手を離そうにも、お前が握り締めてはずせなかった。
――もう離してもいいか？」
「あ、あぁ――ごめん！」
真宙はぱっと手を離した。
すると、くくぅ、と真宙のおなかが鳴る。
ふっ、と清盛は小さく笑い、真宙は恥ずかしさのあまり顔がぱっと赤くなった。
「小林が夕飯持ってきてくれてたんだ。お前の机の上に置いてあるから食えよ。
――立てるか？」
「立てるよ」
そう言いながら立ち上がる真宙だったが、どうも体がふらふらして上手く立つことができない。
「あれ――？？」
ぐらりと体が揺れ、倒れそうになる。
幸か不幸か、真宙は清盛に支えられ、床にぶつかることはなかった。
――どきり――
抱きしめられて感じた清盛の体の温もりが彼を包みこみ、真宙は思わず瞳を閉じその温もりを体の感覚すべてで感じようとする。
（――あ、ありえねぇ！）
一瞬でもそう思ってしまったことに対し、真宙は焦った。
そして『ひろちゃんが女の子になったら、おそろいのお洋服を買いましょうね』とにこやかな顔で話す母を思い出した。
（お、女になってたまるか！）

真宙は決意を新たにするが、清盛を少しずつ意識していることをうっすらと自覚していた。

清盛が慣れた手つきで真宙をベッドに座らせると、夕食を持ってきてくれた。
「あ、ありがと」
真宙は清盛に礼を言うが、目は彼を見てはいない。
「いただきます……」そう言って食べ始めようとするも、動揺の収まらない真宙はうっかり箸を落としてしまう。
清盛その箸を拾い上げるといたずらっぽい笑顔を浮かべ「食べさせてやろうか。宇野君」とわざとからかった。
真宙は赤い顔をさらに赤くしながら「一人で食べれるってっ！」と言い清盛から箸を奪い取ると慌てて食べ始める。

「ご馳走様！」
夕食を完食し、両手を合わせる真宙。
清盛は食器を机に戻すと、真宙の頭を数回撫で「もう寝ろ」とだけ言う。
４０度くらい熱が出たと聞いていた真宙は素直に頷いた。

「――おやすみなさい」
「あぁ」
部屋の明かりを消し、二人はベッドにもぐりこむ。
しばらくして真宙は清盛にあることを確認すべく声を掛けた。
「や、山田？　まだ起きてる？　」
「――なんだ？　」
「あの、俺――記憶がないんだけど、いつパジャマに着替えたんだっけ？　」
真宙の声がやや上ずっているのを清盛は聞き逃さなかった。

「覚えてないのか？俺が着替えさせてやったんだよ。
汗がすごかったから下着も取り替えたんだぜ」

「！！っ――へ……そ、そりゃ、悪かったな。
そっか、ははは……」

真宙は恥ずかしさのあまり体が火照っていくのを感じた。

第九話

（……暇だ）

真宙は寝返りを繰り返している。

昨日の熱も下がり、もうすっかり元気になった真宙だったが、同室の清盛はもとより、小林や桜井、寮母さんから「今日は一日寝ているように」と釘を刺されてしまった。

（俺、もう元気なのになぁ）

真宙はふぅ、とため息をつくと周囲を見渡す。

すると、清盛の私物である本が目に入った。

普段は読書なんかしない真宙だったが、今日は一日ベッドに居なければならない。

今清盛はトレーニングに出かけていないが、彼が帰ってきたら借りたと一言言えばいいだろう。

そう思い真宙は一冊の小説を手に取るとぱらぱらとめくった。

――ひらり。

ページの間から、何かが落ちた。

「あ、やべ」

しおりでも落ちたのかと思い、拾い上げるとそれは一枚の写真だった。

写っているのは、今より少し幼い感じの清盛と――白い肌に艶やかな黒い髪が印象的な和風の美少女――

「――っ！　」

真宙は急に胸の奥が苦しくなった。

（なんだ――この感覚――この、息苦しいような、切ないような、この感じ……

これって、まさか……まさか？！　）

真宙は、全身の力が急に抜けてしまい、ぐらりと崩れ落ちた。

硬いフローリングに真宙の体は落ちていく……はずだった。

ふわり。

（――あれ、痛くない）

恐る恐る目を開けると、そこには清盛の姿があった。

「大丈夫か？　気をつけろよ」

「や、山田……っ！　」

清盛は真宙を軽々と抱き上げて、ベッドに座らせる。

真宙は耳まで真っ赤にしてしまった。

「ご、ごめん。迷惑ばっか掛けて……」

「別に気にするな。病み上がりで、まだ体が本調子じゃないんだろ？　」

真宙の頭をぽんぽんと軽く撫でると、清盛は優しく微笑んだ。

どきっ

真宙の心臓が早鐘のように高鳴る。
（そんなことって……あるもんか……）
まともに清盛の顔を見ることが出来ず、思わず俯く。
「まだ顔が赤いな、明日入学式だけど、大丈夫か？」
清盛に優しい言葉を掛けられ、真宙はまた胸が締め付けられた。

「あ、あのさ。
さっき勝手にこの本借りちゃったんだけど、さ。
あの……ごめん。
中に写真が挟まってたの、知らなくて……」
「写真？」
「お前と、その……彼女さんが――写ってる写真……」
「彼女？」
真宙は写真を清盛の前にぐいっと出した。

「あぁ、この写真か」
写真を受け取ると、清盛は意地悪そうな笑みを浮かべる。
「なに？
もしかして、焼いてるの？」
「ち、ちげーよ！！
その子が気になったに決まってんじゃん！
お前に、そんな美人な彼女がいたんだなって思っただけだよ！」
真宙は今にも噛み付きそうな勢いで清盛を睨んだ。
「へぇ、美人ねぇ」
清盛は写真を眺める。

ずきり

真宙の胸が痛む。

「――お前、茜のことが気になんの？
やめとけ、やめとけ。
こいつ、見た目は大人しいけど、案外うるさいぜ？」
ぽん、と清盛は真宙の頭に手を置いた。
「？
お前の彼女だろ？
俺がどうこう言う話じゃ――」
「茜は俺の妹だ」
「……い、妹？」
真宙は狐につままれたような顔をした。
「妹だよ。
それにしても、なんでこんなところに写真が挟まってたんだろ？
あぁ、他の本もべつに読みたいなら勝手に読んでいいぜ」
「あ……うん。ありがと」

（彼女じゃ……なかったんだ）
安堵感が真宙の緊張をほぐす。
すると同時につつっと大きな瞳から涙がこぼれた。

「真宙？」

「あれ？　変だな。何で涙なんか……。
ごめん、俺、なんか変だ――」
ごしごしと乱暴に手で涙を拭うが、どういうわけか、涙は後から後からあふれてくる。
「真宙――」
不意に清盛にぎゅっと抱きしめられた。
「え？　や、山田？」
「俺、真宙が好きだ」

そう言うと、清盛は真宙にそっと口づけをした。

第十話

（やっと学校に行ける）

あの後、熱をぶり返してしまった真宙は、三日ほど休んでしまった。

今日が初登校。真宙は真新しい制服に身を包んだ。

ダークグレイのブレザーで、学年によってネクタイの色が異なる。

一年生はえんじ色、二年生は紺色、三年は深緑だ。

「あれ……」

きゅっとネクタイを締める真宙だったが、どうしても上手く締めることが出来ず悪戦苦闘していた。

「おっかしいなぁ」

どうしてもネクタイがうまく出来ない。

中学時代は学ランだったため、ネクタイを締めたことが無かったことに今更ながら気がついた。

（父さんが締めてるの見てたから、わかると思ったんだけどな）

「貸せ」

不意に後ろから声が聞こえ、大きな手が真宙のネクタイを締めなおす。

後ろから抱きしめるような体勢に、思わず真宙は体を硬くした。

あの突然の告白の後、唇が離れると同時に真宙は気を失ってしまった。

熱がぶり返したからなのだが、真宙はあの告白もキスも覚えている。

しかし――夢だったのか、現実だったのか、ひどく曖昧なものだ。
清盛もあの後特に様子も変わらないし、まさか「俺にキスした？」なんて聞けるはずもない。
（やっぱり、夢だったんだよな）
真宙はほっとしたような、残念なような、複雑な気持ちになっていた。

「――ほら。できたぞ」
耳をくすぐるように清盛の吐息がかかる。
真宙はおもわず顔を赤らめた。
「お、おう。サンキュー」
伏せ目がちに真宙は礼をいい、清盛はその様子にふっと微笑む。
「ほら、もう行かないと遅刻するぞ」
清盛は真宙のかばんを持つと、さっさと廊下にでてしまった。
「ちょ、ちょっと！
もう病人じゃねーって！
かばんくらい自分で持てるよ！！」
真宙は慌てて清盛を追いかけた。

「――で、なんでこうなってるんですか？　山田君」
真宙は清盛を睨みつけた。
「投票、だろ」
清盛は涼しい顔で真宙を見る。
「投票って……。お前はわかるよ？　だって主席じゃん。
でも俺、頭わるいし、学校だって今日初登校で……、なのになんで俺が生徒会に入るんだ？」
「俺に聞かれてもな。――というか、お前頭悪かったのか」
墓穴を掘った真宙はさらに清盛を睨みつける。

ことの発端はこうだ、朝登校すると担任の石森先生が二人を呼んだ。

「今日正式発表されるんだけど、お前たち二人が生徒会に選ばれたぞ。山田、宇野、よかったな！　これから頑張れよ！　」

石森は目を細め二人を見ると、軽く手を振りながらその場を後にした。

この学校の生徒会に入る道は『立候補』と『投票』『その年の主席』で成り立っている。

この場合、主席はほぼ確定。立候補も同じ。そして投票だが、これは文字通り生徒全体の投票で成り立っており、人気のある生徒が投票されるシステムだ。生徒会の人数が足りない場合に執り行われる。

「――お前、目立つから」

透き通るような肌、柔らかい髪、大きな瞳に長いまつげ。女の子だったら間違いなく『美少女』の部類に入る。

そんな真宙が目立つのは当然の結果といえよう。

「俺が？　なんで？

――あ！

あの、歓迎会の時、ひっくり返ったからか！

それとも入学式から欠席だったから？！

――確かに……目立つって言えば、目立つな……　」

真宙は一人で納得し、がっくりと肩を落とした。

「ま、がんばろうぜ」

清盛はそう言うと、真宙の頭をくしゃくしゃと撫で薄く笑った。

第十一話

真宙は気がつかない。
なぜ、気がつかないのだろうか？
清盛はそう思いながら彼を見る。
今は英語の授業中。
真宙は先ほどから教科書の英文を流暢に読んでいて――彼は英語だけは得意なのだ――ボーイソプラノのような真宙の声は静かな教室に凛と響き渡る。

普通ならクラスメイトが教科書を読んでいようと、教師からの質問に答えようと視線をそちらに向けるものなど居ない。
だが――真宙が指名されると、みな一斉に真宙を見る。
いや、視姦と言ったほうが良いかも知れない。そのザラリとした、舐めるような視線に清盛は嫌悪を覚えた。
時折見せる真宙の色香。
あれは、毒になる。そう、猛毒だ。清盛は確信する。
ふとしたときに見せるあの表情は、まさに女のそれであり、男を誘惑しているとしか思えない。
只でさえ、ここは男子校。しかも全寮制と言う閉鎖空間なのだ。
彼の無意識な振る舞いに清盛は小さくため息をつく。

「俺、剣道部に入るつもりなんだ 」
この前の歓迎会のとき、部活の話になり真宙は清盛と小林にそう話した。
当初柔道部に入ろうかと思ったらしいが、友達の強引な誘いによ

り剣道部に入部したらしい。

もし柔道部に入っていたら――清盛は思いを巡らせる。

あんな華奢な体で、組み手をするのか？もし寝技になったら……

そう思うと余計に苛々としてしまう。

真宙はもっと自分がほかの男にどう映るのかを自覚すべきだ。

清盛は見も知らぬ『真宙の友人』が一人苦労していたのだな、と思った。

剣道は組み手もないし、面をつけるので顔も良く見えない。

その選択は間違いではなかったようで、あれだけの容姿にもかかわらず、手は出されていないようだ。

（でも、俺が……）

清盛は唇をそっと撫でた。

あの甘く切ないキス。

ぼろぼろと涙をこぼす真宙を見て、思わず感情の赴くままにキスをしてしまった。

好きだと告白して……。

幸か不幸か、真宙はその後すぐ気を失ってしまったので、覚えているのかもわからない。

告白の答えも聞けないまま、毎日を過ごしている清盛にとって、これは一種の拷問に等しかった。

ならば、と彼は思う。

ならば俺が真宙を守ってやろう、と。

悪い蟲がつかないように、守ってやろう。

クラスも同じ、部屋も同じ、そして同じ生徒会に入ったのだ。

これ以上の適任はいないだろう。

「おい、飯に行くぞ」

昼のチャイムがなり、清盛は真宙に声を掛ける。
「え？　」
真宙は大きな瞳をますます大きくしながら、清盛のほうを振り向いた。
清盛は半ば強引に真宙の腕を掴み、学食へ歩いていく。
「は、離せよ！
一人で行けるって！　」
真宙は顔を赤くしながら、必死に抵抗する。
清盛はふっとため息をつくと、真宙をまっすぐ見つめる。
その端正な顔を見て、真宙はますます顔を赤くした。
「また、倒れたら俺が困る」
「え？　」
「お前は俺の妹みたいで心配なんだ」
「い、妹？　」
あの写真の美少女が、真宙の脳裏に浮かんだ。
妹だと聞いた今でも、なぜか少しだけ胸が痛む。

「あぁ。あいつは病弱で、強がるけどすぐ熱を出すんだ。
今のお前みたいにな。
だから――心配掛けんな」
清盛の少し寂しそうな顔を見て、真宙は何も言えなかった。

第十二話

「皆さん揃いましたね。それではそろそろ始めようと思います。去年と同じメンバーの皆さんは、今年新たにメンバーになった方々へのフォロー、お願いします。
それでは手元にある資料、２ページ目をご覧ください……」

放課後、生徒会室で本年度の生徒会が執り行われた。
議題は『明日、全校生徒への新生徒会のお披露目、及び球技大会について』である。

新生徒会は１２名。
生徒会長は三年の目黒竜一（めぐろ りゅういち）。
彼は先ほどからちらちらと時計を見ている。
「会長。ここまでで何か意見ありますか？」
まるでその行為を咎めるかのように、きらりと目を光らせているのは副会長の桜井司だ。
「え？　いや～司ちゃん。　僕は何にも意見ないから、先行って頂戴」
そう言うと、また目黒は時計をちらりと見た。
桜井はふぅ、とため息をついて議題を進めていく。

「では、明日の新生徒会では皆さん一言づつ、コメントを述べてくださいね。
――それでは、次に球技大会についてですが……」
「はいはい！提案！」
桜井が言い終わらないうちに、目黒はすっと手を伸ばし、おもむろに立ち上がった。

艶のある黒い髪は少しくせ毛で、目の色も黒、少し童顔のその顔はまるでいたずら好きの少年のようだ。
「いつも応援団長と副団長が学ラン着て、はちまきするのって芸がないと思ってたんだよね。
で、今回からチアガールにするのってどう？」
「却下です」
間髪居れず桜井は提案を拒む。
「なんで？　面白いじゃん！　だって男子校でチアガールだよ？
むさーい青少年が、ミニスカでぽんぽん持って踊るんだよ？　」
目黒はふくれっ面で桜井に講義する。
「面白いとか、面白くないとかではなく、予算的にも時間的にも無理があります。
チアガールの服はどうするんですか？人数はどうするんですか？
踊りの振り付けは？　会長が指南するんですか？　」
矢継ぎ早に桜井に質問をされ、目黒はぐうの音もでない。

結局目黒は応援団長は学ラン、副団長はセーラー服でということで妥協した。
しかしそれも明日の『新生徒会お披露目』の際多数決をとった上でだ。
もし、賛成多数をもらえなかった場合、いつも通りの応援になってしまう。
目黒はがっくりと肩を落としたが、「あっ！　」と声を上げると、「ちょっと俺用事があるから、先帰るわ。司ちゃん後宜しく。ではみなさん明日がんばりましょう」と言うやいなや、生徒会室を飛び出していった。

ぽかんとする新生徒会役員、去年と同じ生徒会のメンバーは苦笑いをしている。

「……さて、気を取り直して球技大会についてですが、資料の１１ページにある通り、他の学年との交流を深めることが目的なので、縦割りのチームとなります。１－Ａ、２－Ａ、３－Ａが同じチームになる、という具合です。それと注意事項としては、部活と同じ球技に参加するのは不可。一年生の皆さんはまだ部活に入っていない方が大半だと思いますので、中学での部活が参考になります。種目は前年度と同様に、バスケットボール、野球、、バレーボールです。何か質問等はありますか？　」

横槍を入れる目黒が居なくなったおかげで、話し合いはスムーズに進んだ。

「では今回はこれで解散にしたいと思います。皆さんお疲れ様でした。それでは明日の一言コメントのほう、よろしくお願いしますね」

桜井はそういうと、お辞儀をした。

他の生徒会役員たちもそれに習ってお辞儀をする。

「先輩お疲れ様です」

真宙は桜井に声を掛けた。

「お疲れ。　真宙君、風邪はもう大丈夫？　」

桜井は真宙の顔を覗き込む。

真宙は少しはにかんだ笑顔を見せた。

「すいません。　先輩にまで心配してもらって……俺、もう元気ですから」

真宙の屈託のない笑顔に、桜井は何か違和感を覚えた。

（微かに、何かが――）

「？　先輩？　」

真宙は少し首をかしげて桜井を見つめる。
「あ、　あぁ。　なんでもないよ。　真宙たちは先に寮に帰って。
俺は少し用事があるから」
「帰るぞ、真宙」
ぶっきらぼうに清盛は真宙に声を掛ける。
真宙が振り向くと、すでに清盛は真宙のかばんを持って、廊下に出るところだった。
「ちょっと！
だから俺、もう元気なんだってば！
あ、先輩すみません。では失礼します」
ぺこりと頭を下げると、真宙は廊下を出て行った。

「気のせい……かな」
桜井は真宙の後姿を見ながら、ポツリと呟いた。

第十三話

翌朝、清盛がシャワーを浴びている隙に、真宙は一人学校に向かった。
清盛はいいやつだと思ってはいるが、未だに病人扱いなのには納得がいかない。
（男の中の男になる筈なのに、どうも調子が狂っちゃうんだよな……）

ふわりと花の匂いがして、真宙は春を感じる。
校舎の手前にある花壇は、春の花が咲き乱れていて、真宙は思わず目を細めた。
今日の生徒会の『一言コメント』はどんなこと言えばいいのかな？　そう真宙が思ったときだった。

「宇野真宙君！」
後ろからフルネームを呼ばれ、真宙は驚き振り向いた。
「か、会長？」
振り向くとそこには、あのいたずらな笑みを浮かべた目黒が立っていた。
「ちょっとこっちに来てくれないか？」
真宙の返事を聞かずに、目黒は腕を掴んで校舎に向かって歩いていく。
「ちょ、ちょっと会長！
腕痛いですって！　放してくださいよ！」
「いいから、いいから。
あと、会長じゃなくて竜一って呼んで。
俺、名前で呼ばれるの好きだからさ」

「か、会長？　」
家庭科室に入ると、目黒は戸に耳を当てて様子を伺っている。
「よし、誰にも気づかれてないな」
そう呟くと、目黒は真宙を上から下まで眺める。
「真宙君、僕は君を男と見込んで頼みたいことがあるんだ。男なら、黙って頷いてくれないか？　」
まっすぐな瞳で真宙を見つめる。
それは一遍の曇りもない、まっすぐな気持ちそのものだった。
「お、男……？　」
「そう！　男として、だ」
真宙の心はぐらりと揺れた。
まるで『男』としての心意気が問われているような気がする。
「わ、わかりました。
俺に出来ることでしたら」
目黒は真宙の手をがっちりと握ると、ぶんぶんと上下に振りながら言う。
「真宙ちゃんじゃないと出来ないんだよ！
ホントありがとう！
――それと……　」
「？　それと？　」
「会長、じゃなくて竜一って呼んで」
目黒が急に膝をつき上目遣いで言うので、おもわず真宙は笑ってしまった。

「か……じゃなくて、竜一先輩……本気ですか？　」
真宙は目黒の頼みを聞いて驚きを隠せなかった。
「本気だから。真宙ちゃんじゃないと駄目なんだよ。
それに――さっき良いって、言ってくれたでしょ？　」

目黒はそう言いながら真宙のネクタイをはずそうとする。
「ちょっと、竜一先輩！　自分でしますから！　手伝わなくていいですって！」
真宙は目黒の手を静止した。
「そう？」
目黒はちょっと残念そうに真宙を見る。
真宙は覚悟を決めたようで、上着を脱ぎ、するするとネクタイを取ると、シャツのボタンをはずした。
シャツを脱ぐと真宙の華奢な体が目に入る。
うん、これなら……と、目黒は思った。
時計に目をやると、ちょうど八時になるところだ。
「時間がないな……」
そう呟くと目黒も自分の上着を脱ぎネクタイをはずす。

（真宙、どこだ？）
朝、シャワーから出るとすでに真宙のかばんは無く、学校へ行ったことがわかった。
下駄箱に真宙の靴があるから、校舎の中にいるのは間違いない。
しかし、教室にも真宙の姿はなく、彼のかばんも無い。
「ちっ」
清盛は舌打ちをすると、使っていない特別教室を片っ端から調べていく。

「……せ、んぱい……」
家庭科室の前で清盛は立ち止まる。
今、真宙の声が聞こえたような気がしたからだ。

「り、竜一先輩、ちょっとこれ、駄目です。きついです」
「大丈夫！　俺に任せろ！　」
「あっ！　そんな無理やり！　苦しいですって！　」
「駄目か？　ちょっと入らないか？　あと少しだよな……」
「っ！　」
「あ、ごめん真宙ちゃん。痛かった？　」
「だ、大丈夫です……」

（な、に、やってんだ！！　）
清盛は怒りに任せて扉を思い切り、力いっぱい開けた。
「なっ！　山田！　」
突然の訪問者に、真宙はひどく驚き、恥ずかしさで耳まで真っ赤になった。

第十四話

「ま――真宙？」
清盛は目を疑った。
それもそのはず、目の前に居るのはセーラー服を着たロングヘアーの美少女だ。

――どれくらいの間があっただろうか。
「そうだ！　輪ゴムだ！」
目黒はそう言うと「山田清盛君だね。ちょっと誰も来ないようにこの部屋見張ってて！　俺、職員室に行ってくるから！」と、清盛の返事も聞かずに鉢巻をひらりとなびかせながら飛び出して行く。
黒い学ランがとてもよく似合っていた。

「真宙……だよな？」
しんと静まり返った教室で、清盛の声がやけに響く。
「――なんだよ。文句でもあんのかよ」
真宙は耳まで真っ赤にしながら上目遣いに清盛を睨む。
すっと清盛は真宙に近寄り、長い髪をさらりと揺らした。

「……づら……」
「――せめてウイッグって言えよ」
真宙は力なくうな垂れる。
華奢なうなじが髪の間から見えて、清盛は思わずそっと指で触れた。
「な、なに？！」
びくんと体が動き、真宙は大きな瞳で清盛の目を見た。
「あ――ごみが付いてたから……」

本当はごみなんか付いていなかったが、清盛はとっさに嘘をつく。
「え？　あ、ごめん」
真宙はばつが悪そうに目を伏せ、ウエストの辺りをいじり始める。
「――昨日、会長が言ってたろ」
「え？　」
「あれだよ。チアリーダがなんとかってやつ。それがおじゃんになったから、せめてセーラー服だけでも通したいんだと」
「あぁ。だからセーラー服……でもなんでお前なんだ？　」
「ほんとは会長が着て、みんなに披露するつもりだったらしいんだけど、用意したこの服がどうしても入らなかったって。どうしたもんかと途方にくれていたとき、たまたま俺を見かけて――」
「それで、こうなったのか」
清盛は真宙をまじまじと見た。
透き通る肌。華奢な首筋。男のものとは思えないすべすべとした足。
時折髪を掻き揚げるしぐさはとても妖艶で、思わず抱きしめてしまいたくなるほどだ。
「お前、さっきから何やってるんだ？　」
清盛は勤めて平静を装う。真宙は先ほどからウエストのところをいじったままだ。
「これか？　この服、会長のお姉さんのらしいんだけどな、ホックがどうしても掛かんねーんだ。
いくら身長が同じ位でも、やっぱ女のウエストって細いんだな」
「お前が不器用なんじゃねーの？　」
清盛は意地悪く笑う。
「ちげーよ。先輩だって入れれなかったし。やっぱくびれの差だって！　」

「ふーん？」
清盛の薄い笑いに、真宙はかっとなった。
「なんだよ！　お前に出来るんならやってみろよ！」
真宙はずいっと清盛の前に歩み寄ると、ほらといわんばかりにホックの部分を清盛に見せる。
（こいつ――俺を試してるのか？）
服の間から、真宙の肌が見える。それは白く透明で、清盛を誘ってるかのようだ。
「……おまえ、何でシャツを着てないんだ？」
触れたい気持ちを理性で抑え、真宙の前で膝をついてスカートのホック部分を持つ。
「シャツ着ると、このセーラー服の首元からめちゃめちゃ見えちゃうんだよ」
セーラー服の胸の辺りをつまんで説明する真宙だが、パタパタと制服を動かすたびに艶めかしい鎖骨が見え隠れする。
こいつは悪魔か。と清盛は思う。
人が必死で煩悩を理性で抑えているときに、なぜこういう行動に出るんだろうか、と。
「な？　無理だろ？」
知ってか知らずか、真宙は勝ち誇ったような、少し意地悪な笑みを浮かべる。
清盛は真宙の顔をじっくりと見た。
「な、なんだよ」
真宙は大きな瞳を清盛に向ける。
「――腹、ひっこめろよ。大体お前、幼児体型なんじゃねーの？」
清盛は抱きしめたくなる衝動を必死に抑えて悪態をついた。

「なんだと！　俺の腹は出てねーよ！　見ろ！　この引き締まった腹を！　」
真宙はこれでもかといわんばかりにセーラー服をたくし上げる。
確かに真宙のお腹には無駄な脂肪は付いていない、しかし――その透き通った白い肌が余計清盛の気持ちを駆り立てる。
（こいつは……何にもわかっちゃいないっ！　）

「誰かいるのか？　」
ふいに家庭科室のドアが開く。
「い、石森先生？！　」
真宙は驚きのあまり素っ頓狂な声を上げる。
石森は二人の姿をみて、驚きのあまり手に持っていた本を落とした。

それもそのはず。
真宙は、あともう少しで胸が見えそうなところまでセーラー服をたくし上げているし、清盛は真宙のホックを入れようと膝を付いている状態なのだ。

「や、山田！　交際するのは勝手だがな、他校の生徒をこんなところに連れ込んで、何しようとしてるんだ！
桜沢女学校のコだな？　名前はなんだ！　朝っぱらだぞ！　」
石森は顔を真っ赤にして怒っている。ぼさぼさの頭から湯気が出そうな勢いだ。

第十五話

「やだなセンセ。１－Ａの宇野真宙君ですよぅ」
不意に石森の後ろから、声が聞こえた。
目黒は鉢巻をひらりとなびかせて、真宙の目の前に来る。
「真宙ちゃん。輪ゴムもって来たよ～。
これをホックのところにくっつけると……ほら！　スカートがずり落ちない！　」
まるで某通販番組の司会者のように、目黒は鮮やかな手つきで輪ゴムをホックに掛けた。

「宇野？」
石森は信じられないといった顔で、真宙をまじまじと見た。
「な、なんですか。先生」
あまりにじろじろと見るので、真宙は恥ずかしくなり、目を伏せる。

「あ、先生も球技大会で副団長はセーラー服って言うのに一票入れてくださいね」
目黒はウインクをしながら、にこやかに言う。

「あー、そう言うことか」
無精ひげを右手でじょりじょりと擦りながら、石森は一人納得する。
「目黒。お前宇野にあんまり無理させるんじゃないぞ。
それにしても――」
石森は真宙を見ながらしみじみと言った。
「ちょっと似合いすぎなんじゃないのか？　」

「では、新年度生徒会役員の紹介です」
体育館に桜井の声が響く。
「皆さんおはようございます。書記を勤めます二年Ａ組の木田明人（きだ あきと）です。
前年度の経験を生かし、がんばりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたしま――」

木田の一言コメントが終わるか終わらないかというとき、不意にがらりと体育館の戸が開いて、生徒たちは一斉に振り向いた。
そこに立っていたのは、黒い学ラン、白の手袋と同じ色の長い鉢巻を身につけた目黒会長だった。
「みなさんおはようございます！　」
大きな声で挨拶をすると、目黒は鉢巻をなびかせて、壇上へと走っていく。

「目黒！　今度は何企んでるんだ？　」
「やっぱ、お祭りごとか？　」
「応援してるぞー！　」
驚く一年生を尻目に、目黒のお祭り好きを知っている二年生と三年生から野次がとんだ。

目黒は桜井のマイクを奪うと、壇上の真ん中に立つ。
「みなさんご声援ありがとうございます。
新生徒会会長の目黒竜一です。
会長って言われるのはどうも性に合わないので、みなさんどうぞ竜一って呼んでください。
あ、りゅうちゃんでもいいですよ」
目黒はそういうとウインクをした。

格式ばっていた会場が一転、ちょっとしたイベント会場のような雰囲気に包まれる。

「さて、来月に行われる球技大会についてですが、僕にはどうしても納得がいかないことがあります。
それで、今回皆様に僕の提案を聞いていただき、多数決によって方針を決めていただきたく思います。
僕が今着ている学ランですが、皆さんどう思いますか？
二、三年生はご存知でしょうが、これは球技大会時に応援団長と副団長が着用する衣装です。
せっかく学年の敷居を乗り越えて、楽しく和気藹々と交流をしようというのに、これではいささか寂しいと思いませんか？」

目黒はそう言うと、入ってきた扉のほうに歩いていく。
「そこで、僕なりにいろいろ考えまして、副団長の衣装を新たにリニューアルすることを提案します」

少しざわついた場内を満足げに見渡すと、目黒は扉を開け、真っ黒いマントにフードを被った人物を招き入れる。

その人物の横には、目黒と同じ学ラン姿の山田もあった。

目黒は二人に目配せをすると、付いて来いといわんばかりに壇上に進み始める。
「この二人は生徒会のものですが、団長と副団長のモデルとして僕の提案する衣装を着てもらいました。
皆様のお役に立てれば幸いに思います」

すっと息を吸って、目黒は出し抜けに手を上に思い切り突き出し叫んだ。
「みんな！　楽しい球技大会にしたいかー！」
「おーーーーー！！！！！　」

まるで、某テレビ番組の高校生クイズのノリだ。

目黒には天性の人を惹きつける才能を持っている。

そして彼は無類のイベント好きであり、学校の行事も皆で一丸となって楽しく行えればと常々思っている。
前年度の文化祭時に「コンテスト」を開催し、文化祭を大いに盛り上げたことは生徒にとっても記憶に新しい。

「ではでは。みなさんお待ちかねの新副団長の衣装です！　」
目黒は真っ黒い布をふわっとめくると、セーラー服に鉢巻をヘアバンド風に結んでいる美少女が現れた。
「これが新副団長の衣装です！　」
「おお～っ」と会場内はどよめく。
そしてすぐに割れんばかりの歓声があがった。

第十六話

大歓声の中、目黒の思惑通り賛成多数により可決。

そして学校内において、宇野真宙は『女装の麗人』なる不名誉な称号を得た。

（――俺、何が間違ってたんだろう？　）

「男として」臨んだはずが、なぜか女装。

しかも清盛と「できてる」とか、目黒と「できてる」とか――変なうわさが出ている。

（なんだよもうーっ）

真宙はむすっとした顔で、頭をがりがりと掻いた。

（男同士で、なんでそういう話になるんだ？

まさか――宇宙人だって、ばれてる……？）

真宙は色々な思いを巡らせる。

（もし、ばれてたら――）

「ばれたら？　お前何か悪いことしたのか」

不意に声を掛けられて、真宙の体がおもわずびくんと反応した。

「や、山田！！

――なんだよ、別に俺、何にも悪いことしてねーぞ。

大体、人の頭の中のぞくなよな」

「頭ん中のぞけるわけないだろ？

お前が自分でばれたらどうのって言ってたんだけど？」
「へ？
俺が？　自分で喋ってた？」
真宙はぽかんとして目を丸くしている。

「――つか、お前。
俺にあんまり近づくなよ。
――お前だってあのうわさ知ってるんだろ？」

「あぁ、俺と真宙が付き合ってるってやつ？」
清盛はベッドに腰を下ろすと、雑誌をぺらぺらと捲りながらぶっきらぼうに言う。
「別に言いたい奴には言わせておけばいい。
そのうち勝手に飽きるだろ」

「飽きるだろって……。
大体お前の態度が――その、なんていうか、あの……」
真宙が言葉に詰まっていると、清盛は雑誌から目を離して真宙をまっすぐに見た。
何もかも見透かすような瞳に、真宙の心臓はきゅっと締め付けられてしまう。
「んっと……つまり……そ、その――」
「俺と本気で付き合いたいって？」
清盛はわざと意地悪く笑う。
「そ、そんなわけねーだろ！！」
真宙は真っ赤な顔をして反論するが、清盛は意にも介していないらしい。

「それより、ほぼお前に決まりそうだぞ」
清盛は目線を雑誌に戻しながら言う。
「？　なにが？　」
「副団長だよ。
二日くらい前に投票したろ？　」
「え？　――あぁ、なんかあったな、そんなの」

団長は二年から、副団長は一年からそれぞれ投票で決まる。

「副団はお前でほぼ決まり。
団長は今のところ接戦みたいだけど、桜井先輩が優位らしいぜ」
「へぇー。桜井先輩か」
先輩なら、こともなげにこなしてくれるだろうと真宙は思った。

「お前と付き合ってる男がまた増えるかもな」
微かに笑みを浮かべた真宙を見て、清盛は意地悪に言う。
「なっっ！　なんで、なんでそんな話になるんだよ？！　」
真宙は真っ赤になって反論した。
「だってそういうことだろ？
俺にせよ、目黒会長にせよ。
お前の近くに居る奴は、多分うわさの餌食になるんだぜ？
なってないのは、小林くらいだけど……あいつは彼女いるからな」

「だから、なんでそういう話になるんだ？
なんで俺の周りに居る奴なんだ？　」
真宙は清盛を少し上目遣いに睨んだ。
清盛は少し不思議そうな顔をして、真宙を見る。
「――まさか、とは思うが……。
お前自覚ないのか？　」

「自覚？　何のことだよ？　」
意味が分からない、と少し膨れる真宙の襟首を掴むと、清盛は風呂場に連れて行く。
「なにすんだよっ！　この馬鹿山田！　」
山田は暴れる真宙を後ろから羽交い絞めにすると、右手で彼のあごを掴んだ。
鏡に映る真宙と清盛。
真宙は自分と清盛との体格差を改めて思い知らされる。
「これを見て、お前はなんとも思わないのか？　」
「なんだよ、俺がちびって言いたいのかよ」
少し検討違いの答えを聞いて、清盛は首を横に振る。
「違う。
お前、男の割には、女みたいな顔立ちしてるって言いたいんだ」
耳元で聞こえる清盛の低音にどきどきしながら、真宙は自分の顔をじっくりとみた。

「そう、かな。
まぁ、俺、母さん似ではあると思うけど、そんなに女っぽくねーだろ？　」
鏡の中に映る清盛を睨みながら、真宙は答えた。

第十七話

（俺、そんなに女みたいな顔してるかなぁ）
真宙は一人鏡の前で自分と睨めっこしていた。
（まぁ、確かに俺は混血児だし、本来なら性別のない種族なんだから多少は中性的な顔立ちかもしれないけど……）

自分でも少しは自覚していたのだが、清盛から指摘されてしまい、真宙は気になり始めた。
しかしどの角度から見ても、これと言って代わり映えしない自分の顔。
今まで付き合ってきた自分の顔なだけに、評価するのはなかなか難しい。

ふと、鏡を見ていたら清盛に後ろから羽交い絞めにされたことを思い出し、なぜかかっと顔が赤くなった。
（なっ、なんだよ俺！　なんであんなやつのこと思い出してるんだよ！　）
そう思ってしまうと、ますます清盛のことを考えてしまう。
あの低く心地のよい声。
凛とした瞳。
触れてしまった唇の、あの感触――

真宙はどきどきと高鳴る心臓を抑えることが出来ずに困惑する。
（俺、やっぱ変だ――）
目をぎゅっと瞑っても、瞼の裏には清盛の顔が見える。
（何だってんだよっ！　）
真宙は蛇口をひねると、勢い良く出てくる水に自分の頭を突き出

した。
まだ春先ということもあり、水はとても冷たかったが、自分の頭を冷やすのにはちょうどよく思えた。

（俺は、男だ。
今までもそうだし、これからだってそうだ）
蛇口をきゅっと閉めて鏡を見ながら、真宙は自分にそう言い聞かせた。
そうしないと、自分が自分でなくなるような気持ちになっていたのだ。
両手でぱちんと頬を叩いて気合を入れ、真宙は気持ちを落ち着ける。
ふぅ、と短くため息をついて、真宙は近くにあったタオルを無造作に掴み髪をごしごしと拭いた。

風呂場から出ると、ちょうど清盛が部屋に入ってきたところだった。
「お、お帰り」
変に意識しないようにと思う真宙だったが、どうもギクシャクとしたものになってしまった。
「ただいま」
そのことに全く関心がないのか、清盛は何事も無かったかのように返事をする。
そしておもむろに真宙の目の前に来ると、真宙の肩に掛かっているタオルを見た。
「これ、俺のだけど？　」
「えっ？　」
真宙がタオルを手にとって良く見ると、確かに自分のタオルではないことに気が付いた。
「ご、ごめん。

間違えた。
山田の使ってごめん」
真宙はまた変に意識してしまい、顔を赤らめる。
「別にいい」
清盛はぶっきらぼうにそう言うと、真宙の髪をそのタオルで拭いた。
「な、なに？　」
「髪、めちゃくちゃ濡れてる。
このままで居ると風邪引くぞ」
清盛は少し強めにごしごしと真宙の髪を拭く。
真宙は心臓の鼓動が早くなるのを感じて、清盛に気づかれてしまうんじゃないかとひやひやした。
しかしその裏で、このまま清盛と一緒にいたいという思いも強くなっていくのを感じていたのだった。

第十八話

「応援合戦ってこれを見てもらえばわかると思うけど、毎年みんな力を注ぐんだよ。
応援ポイントは結構点数入るからね。
実際球技大会って銘打ってあるけど、そっちのほうがオマケっぽくなってきてるし」
桜井は去年の応援合戦のＤＶＤを見せながら、真宙に説明する。
清盛が言っていた通り、副団長はすんなりと真宙に決まった。
団長は本当に接戦で、数表の差で桜井がその座に納まった。

「先輩。応援の曲とか、応援のときの動きってどうやって決めるんですか？」
真宙はＤＶＤを見ながら、桜井に質問をした。
画面には去年の応援団長たちが機敏な動作で応援をしており、ひな壇に上がっている他の生徒が色紙を持ち音楽に合わせて人文字を作っている。
それはとても統率の取れた動きで、真宙を釘付けにした。
「曲のほうは俺と真宙君で１－Ａ、２－Ａ、３－Ａに行って、投票してもらうしかないだろうね。
一応先生方には言ってあるから、明日の休み時間にクラスを回って、投票をしてもらって、放課後二人で開票。
明後日にそれぞれのクラスに通達して、明々後日までには応援の練習を始めるつもりだよ。
応援の動きは曲が決まらないとだめだけど、振り付けが大好きな人が３－Ａにいるから、まあその辺は心配しなくて良いんじゃないかな」
桜井は優しく微笑むと、真宙の頭をくしゃっとなでた。

「そうそう、一応他のクラスを意識して、練習は秘密裏にやることになってるんだ。
去年は無かったみたいだけど、スパイとかが出るときもあるらしいし……」
「す、スパイ？　ですか？　」
真宙は目を丸くして桜井を見る。
「そう。スパイ。
だから、応援合戦が終わるまでは、他のクラスの友達にも応援の内容は秘密だよ」
桜井はまじめな顔で、真宙を見る。
「は、はい！　」
真宙は思わず身を硬くしたが、すぐに桜井は柔らかい口調で「まあ、大丈夫だから心配しないで」と言って頭をくしゃくしゃと撫で、真宙の緊張を解きほぐしてくれた。

その後、投票用紙の準備を終えると、夕食の時間を少し過ぎたところだった。
「ご飯食べにいこう」と桜井に促されて、食堂へ向かう。
今日は肉じゃがだろうか？
先ほどから煮物のよい匂いが真宙の鼻先をくすぐる。

「それにしても、真宙君と同じ寮でよかったよ。
これで団長と副団が別の寮だと、プランを練るのも一苦労だからね。
去年は――俺、副団だったんだけど、団長と寮が違ったから大変だったよ。
門限もあるしね」

食堂で桜井と真宙は向かい合って座わり、去年の応援合戦の話をした。
桜井との夕食はそれは楽く、真宙にとって清盛以外の人と食べる夕食は初めてだった。

（山田は、もうご飯食べたのかな？）
ふと、真宙は清盛を思い出した。
なぜか胸がきゅっと締め付けられ、顔が火照るのを感じる。
そして、その気持ちを抑えるかのように、真宙はご飯と肉じゃがをがつがつと食べた。

第十九話

その日は真宙も桜井も忙しかった。
桜井が言った通り、休み時間ごとにクラスを回って説明と投票箱の設置。
放課後はその箱を回収して、寮にもどり、桜井の部屋で開票をした。

「――そろそろ一息つけようか？」
桜井はそう言うと、真宙に紅茶を出す。
真宙の目の前に置かれたカップからダージリンのよい香りがして、鼻先をくすぐった。

「今回は、意外と早く曲が決まりそうだね」
桜井はカップの紅茶を一口飲むと、真宙に微笑みかける。
「そういえば、この曲がほかのクラスとかぶった場合ってどうするんですか？」
「あぁ、二年生の学年主任の山下先生に各クラスごと個別に報告することになってるんだ。
曲が被ってると山下先生が知らせてくれる事になってる。
早ければ早いほど志望した曲が使えるって事だね。
もし他のクラスに希望の曲すべてが使われてるときは投票やり直しになるらしい。
……俺もそれはお目にかかったことはないけどね」
桜井はそう言うと「さてと」と言って開票を再開した。
真宙も慌てて紅茶を飲み干すと、仕事に取り掛かる。

それから一時間もしないうちに開票された票がまとめられた。
「――この時間なら山下先生に報告できるな。

さっさと行ってこよう」
「は、はい」
桜井は曲をまとめたレポート用紙を持って部屋を出る。
真宙はそんな桜井の後を追った。

「お、一番のりはA組か！」
快活そうな笑顔を見せる山下先生。
かなり筋肉質な彼の体はがっちりとしていて、みるからに体育教師だ。
「一番乗りって事は？！」
「おう！　一位の曲をそのまま使えるってことだ」
山下はがははと笑い、桜井はガッツポーズをする。
静かな印象だった桜井の意外な一面を見て、真宙もおもわず嬉しくなった。

「せっかくだから、ケヤキ寮に行ってみるか？」
学校からの帰り道、桜井は不意に真宙に言った。
「え？　ケヤキ寮？」
「うん。門限までは少し時間があるし、振り付け好きの先輩に曲が決まったことを教えないとね」
「どんな先輩なんですか？
……もしかして、竜一先輩とか？？」
真宙の質問に桜井は笑顔で答えた。
「会長は残念ながらC組なんだよ。
でも、きっとC組の振付師は会長だろうね。
俺たちが頼むのは加賀谷（かがや）先輩。

会長とは犬猿の仲でねぇ、やたらと張り合うんだよ」
桜井はそう言うとくくくっと笑った。
「犬猿の仲？　」
「まぁ、ライバルだね。
お互いを意識して、高め合っていくみたいな。
去年の球技大会を真宙くんに見せてあげたかったよ。
すごかったんだから」

ケヤキ寮に着くと、早速加賀谷の部屋を訪ねた。
橘寮とは違い、ケヤキ寮は一人一部屋の割り振りになっている。
真宙は部屋をぐるりと見渡した。
少し小さめだが、機能的なつくりをしている。
作り付けの家具も程よい大きさで、シンプルな作りなだけに、飽きのこない感じになっていた。

「まあ、座れや」
加賀谷がふたりに促した。
とりあえず桜井と真宙は加賀谷のベッドに腰を下ろす。
「曲が決まったんだろ？　団長」
背が高く、きりりとした眉毛。
髪の毛は短く逆立っていて、半そでから覗く二の腕は引き締まっている。

「えぇ。一番乗りだったので、一位の曲に決まりました。
曲は『Ｆｌｙ－ｄａｙ』最近流行のグループ『ｄｏｍａｉｎ（ドメイン）』の曲です」
「あー、あの曲か。
確かにノリもいいし。
そうか、あの曲かー」
加賀谷は一人納得し、腕を組む。

おもむろに立ち上がると、部屋の中をうろうろと歩き出した。
そして、何かを思いついたみたいで、真宙と桜井に満面の笑顔を見せる。
「よし！　テーマはＦｌｙ－ｄａｙに則って『飛翔』って感じにするぞ！
明後日……いや、明日の放課後までには振り付けを考えておくからな」
加賀谷はそういうと「丸秘ノート」と書かれた一冊のノートを取り出し、机に向かった。
「それじゃあ先輩。俺たちｊは帰りますので、よろしくお願いします」
桜井がそういうと、加賀谷は振り向きもせずに「おう」とだけ返事をした。

第二十話

「違う！　そうじゃない！　」
加賀谷の罵声が飛んだ。
「す、すみません」
真宙は息を切らしながら謝る。

加賀谷の振り付けは、予定より早く、次の日の朝には出来ていた。
桜井はそつなく振り付けを覚え、割り当てられた特別教室で他の生徒と練習をしている。
真宙はと言うと、まだきちんと覚えておらず、加賀谷の部屋での特訓を余儀なくされた。

「宇野が出来ないと、俺の考えたパフォーマンスがきれいに決まらないんだ。
だから、頑張って覚えろ！
体に叩き込め！！　」
加賀谷は真剣だ。
その真剣さに答えるべく、真宙も額に汗をして答える。

「よし！　１０分休憩だ！　」
ふらふらになった真宙に、加賀谷はそう言うと、スポーツドリンクの入ったペットボトルを渡した。
「ありがとう――ございます」
床にぺたりと座って、真宙はごくりとスポーツドリンクを飲む。

カラカラだった体に、水分がいきわたる。
真宙は一気に飲むと、ふぅーっと息を吐いた。
その姿を見て、加賀谷は思わず呟く。

「宇野は、やっぱ結構女顔だな」
「なっ！　」
急にそんなことを言われて、真宙は思わず加賀谷を睨んだ。
「何変なこと言ってるんですか！
俺、マジ怒りますよ！！　」
「あ――すまん、すまん。
ついうっかり口から出てしまった」
加賀谷はばつが悪そうに頭を掻いた。

「でも、その顔なら俺の振り付けにばっちりなんだよ。
今回、副団はあの会長のせいでセーラー服になっちゃっただろ？
前から考えていた振り付けが使えなくなっちゃったから、実は結構困ってたんだ。
確かに女装はおもしろいんだけどさ、女装するとやっぱり真剣に応援をしても、その真剣さが伝わらないからな。
真剣どころかギャグになっちまう確率のほうが高そうだし。
だから、今回はどうしたもんかと思ってたんだけど、副団があの時のセーラー服のやつだと知って、本当にうれしかったんだぜ？　」
「え？　嬉しかった？　」
真宙は思ってもみない話に驚く。
「そう。嬉しかったんだ。
宇野なら、真剣に応援しても全然変じゃない！
むしろかっこよく出来そうだからな。
しかも、男臭くって感じじゃなく、シャープで洗練された感じにな」
加賀谷はそう言うと笑って見せた。
その顔は人懐っこくて、真宙は思わずどきりとする。

「――よし。１０分経ったから、また始めるぞ」
「は、はい！　」

練習は門限ぎりぎりまで続いた。
その甲斐あって、真宙は何とか加賀谷が「よし！　」と頷くレベルにまで上達した。
「宇野。頑張ったな！
この感じを忘れないようにしろよ」
「はい！　加賀谷先輩どうもありがとうございました！　」
真宙はぺこりと頭を下げて、加賀谷の部屋を後にしたのだった。

第二十一話

「お帰り」
清盛の声が部屋に響く。
真宙はなんとなく顔を合わせづらくて、清盛のほうを見ないまま「ただいま」とだけ呟やいた。
「飯、行こうぜ」
清盛は真宙の態度を気にすることなく、見ていた雑誌を棚にしまうと真宙の腕を掴む。
「ま、まてよ」
いつもならそのままなし崩しに食堂に行くのだが、この日は違っていた。
真宙が清盛の手を抑えたのだ。
「なんでいつもお前はそうなんだよ。
俺、もう病人でもねーし、腕まで掴まなくてもいいだろ？
そうそう倒れたりしねえよ！」
彼は顔を少し赤くして、清盛を睨む。

「――お前が――気になるんだ」
低く静かな声で言うと、清盛は真宙を見つめた。
その瞳は優しく自愛に満ちていてはいたが、一抹の不安を掻き立てるような目だった。
清盛の表情に戸惑いつつ、真宙は目を逸らしもごもごと話す。
「だから。もう病気治ったって……」
「違う。
そういう意味じゃない」
真宙の言葉を、清盛はすぐに否定する。

「お前のことが好きなんだ。
だから、気になる。放っておけない」
「え――？」
「好きだ。真宙」

不意に真宙は清盛に抱きしめられた。
その温もりに、真宙は思わず清盛の背中に腕を回して抱きしめたくなる衝動に駆られる。

「――っ！！」
真宙ははっとして清盛の手から逃れる。
「俺、男だぜ？
お前、何考えてんだよ！」
耳まで真っ赤になりながら、真宙は清盛と視線を合わせることなく声をあらわした。
「別にお前が男だろうと女だろうと関係ねーよ。
俺はお前が好きなんだ。
――真宙は俺のこと、嫌いか？」

どきり。

真宙は困惑していた。

ここ最近、真宙は気になることがあった。
清盛のことを考えると、心臓がきゅっと締め付けられたり、触れたくなったり、抱きしめられたいとぼんやり考えることが多かったのだ。
その都度、「ありえねぇ！」と否定はしていたのだが、事ある毎に清盛のことが頭から離れなくなっていた。

「き、嫌いじゃない……けど……」
「けど？　」
「……あの……考えさせて――」
真宙はうまくまとまらない頭をフル回転させた。
清盛のことは好きだ。
そう。真宙は気が付いた、が、真宙は混血種とはいえ宇宙人なのだ。
清盛は生粋の地球人で、宇宙人の存在なんて全く知らないだろう。
真宙は知られるのが怖いのだ。
正体を明かして、清盛がどんな態度を取るかも分からない。
もし嫌われてしまったら――そう思うと、真宙はますます不安になる。
幼い頃心に負ったあの傷がまたじくじくと痛んできた。

ぽたり。
気が付くと真宙は涙がこぼれる。
清盛はそれに気が付き、真宙の涙を拭いながら「俺はお前の答えが出るまで、待つから」と優しく言った。

（俺もお前のこと、好きだ――）

声にならない言葉が真宙の頭の中でループしていた。

第二十二話

真宙は夢を見た。
清盛と他愛ない話をする夢だ。
そのうち、なぜか清盛に宇宙人だということがばれてしまう。
笑っていた清盛が急に冷たい目になり、自分から離れていく。
お願い、話を聞いて。
そう言おうとするも、声が出ない。
『いかないで、話を聞いて、謝るから……お願い……』
苦しくて体がばらばらになりそうだった。
その時、何かが聞こえた。

「――。おい、真宙」
体が揺れる。
重たい瞼をなんとか持ち上げると、そこには心配そうな清盛の顔があった。
「大丈夫か？　真宙」
「あれ――」
ぼんやりとする頭を少し振って、真宙は清盛の顔を見た。
薄暗い部屋なのに、なぜか清盛の顔だけははっきりと見える。
「お前、またうなされていたぞ」
真宙の涙を拭いながら、清盛は言う。
「お前、俺が言ったこと、気にしてるのか？　」
「言ったこと？……ちがうよ。俺、山田のこと好きだし。
それより、俺宇宙人だから、それで、嫌われちゃうかなって思って……」
いまだ夢うつつだった真宙は正直に答えた。
清盛はふっと笑うと真宙を優しく抱きしめ、背中をぽんぽんと軽く叩く。

「大丈夫、俺はお前が宇宙人だろうと地底人だろうと、悪魔だろうと、好きなことにかわりねーから」
真宙は安心したかのように瞳を閉じ、静かな寝息を立て始めた。
清盛は起こさないようにそっとベッドを離れる。

「ったく。どんな夢みてんだ？　」
そう悪態をつく割に、清盛は嬉しさを隠せずにいた。
夕方告白したときには聞けなかった真宙の本音を聞けたからだ。
（やっぱ男同士っての、気にしてんだろうな）
清盛は少しまじめな顔で真宙を見る。

男が男を好きになるなんて、清盛自身真宙に会うまでありえないと思っていた。
しかし、真宙の一挙手一挙動に目を奪われた。
見るたびに気になった。
目が離せなくなっていた。
そして――気が付くと好きになっていたのだ。
そこには理屈なんてものは存在していない。
あるのは「真宙のことが好き」と言う原始的な感情のみだ。
清盛もその感情に気が付いたときは、戸惑い困惑した。
突然の告白に真宙も戸惑っているに違いない、と清盛は思う。
真宙の寝息を聞きながら、清盛は目を閉じるが、今夜はどうも眠れそうになかった。

朝になり、真宙は清盛に起こされて目を覚ました。
「そんなに寝てると遅刻するぞ」
「わっ！！　」
目を開けた真宙は清盛の顔が近くにあったのにびっくりして、思

わず大声を上げる。
清盛はふっと笑うと、真宙の髪をくしゃりと撫でた。
「な、なんだよ！　」
顔を真っ赤にして抗議する真宙に、清盛は余裕の顔で言った。
「俺、お前が宇宙人でも好きだからな。
だから、お前もゆっくりでいいから俺のこと、どう思ってるか教えろ。
気長に待っててやるから」
「ふぇ？？？　ええーっ！！？」
真宙はぽかんとしていたが、ややあって素っ頓狂な声を上げた。

第二十三話

（どういうことだ？　）
真宙は困惑していた。
清盛の言葉が、真宙の頭の中でループする。
『お前が宇宙人でも好き』
真宙はその意味を考えているが答えは出てこない。
（俺が宇宙人だって知ってるのか？　それとも別の意味で――比喩的表現ってやつなのか？　）
聞きたくても、聞けない。
真宙は深くため息をついた。

昔。真宙がまだ小学生だったころ、親友と思っていた友達に自分は宇宙人だといったことがあった。
友達は真宙のことを『うそつき』と罵り、秘密だと言ったのにクラス中に言いふらしたのだ。
その時の担任の先生は機転の利く人で『地球も宇宙にあるのだから、人間も宇宙人なんだよ』と朝のＨＲの時に言ってくれた。
そのお陰で、真宙を嘘つきだという人は居なくなったものの、真宙の心に暗い影を落とすことになった。

「――ひろ。真宙」
急に声を掛けられて、真宙は驚いた。
「もう昼飯の時間だぜ？　食いにいくだろ？　」
ふわり。と清盛は笑った。
「え、あ、うん」
真宙は曖昧な表情で清盛に答えた。

「なあ、真宙。
俺、言ったこと後悔してないけど、お前が嫌だったら、なかったことにしてもいいぜ？　」
食堂でB定食を頼んだ清盛は、豚のしょうが焼きを食べながら真宙に言った。
「え？　それって……」
真宙は山菜わかめうどんをすすりながら、驚きの表情を浮かべる。
「だから、朝言った話だよ。
お前、そのせいで今日の授業全部上の空だったじゃないか。
やっぱ、急に言われても、驚くよな。
お前も男で、俺も男だし。
でも、俺、お前にちゃんと言いたかったんだ。
だから、お前が嫌ならなかったことに――」
「――じゃない」
「え？　」
「嫌じゃなかった。正直驚いたけど」
「ほんと――か？　」
「で、でも。まだ色々頭ン中ぐちゃぐちゃで――もうちょっと。
もうちょっとだけ時間が欲しい」
「待つよ。お前の中で答えが出るまで。朝もそう言ったろ？
俺はお前が宇宙人だろうと地底人だろうと、悪魔だろうとって」
「ち、地底人？　」
「ま、お前ならいいってことだ」
そう言うと、清盛はまたB定食を食べ始めた。

（な、なんだ。宇宙人ってのはなんとなく出てきただけか）
真宙はふっと力が抜けるようだった。
それと同時にちょっと嬉しくなる。
それは先ほど清盛が言った『お前ならいい』という言葉によるも

のだった。
自分が自分らしくいればいいと言われたようで、今まで嫌だった宇宙人の血すら愛しいものに感じられた。

第二十四話

「あー、疲れた」
「お疲れ～」
「お先に！」

放課後、応援練習も終わり、生徒は自宅である寮へと帰っていく。

今日の練習は桜井と共に本番さながらに行われた。
ちがう点は、ガクラン＆セーラー服ではない、といったところだろう。

「先輩お疲れ様でした」
真宙は桜井と加賀谷にぺこりと頭を下げる。
「先輩方のお陰で、なんとか本番に間に合いそうです」
真宙がそういうと、桜井は柔和な笑みを浮かべ、加賀谷は「本番も期待してるぞ！　副団長！」と言うと、真宙の背中をばんばんと叩いた。

荷物を片付けてから真宙は岐路につく。
隣には、清盛。
特に話をするわけでもなく、仏頂面で真宙の隣を歩いている。

（俺、こいつに告白されたんだよな……）
真宙はちらりと清盛を見た。
（本当に、俺なんかを好きなのかよ？
でも、真剣……だったよな……）
昨日のこと、今朝のこと、昼間のことを真宙は思い出していた。

自分も清盛のことが気になっているのは分かる。
好きだということも。
しかし――答えを清盛に言う前に、確認しなければならないことがあった。
それは自分の血が、どこまでアルデイシアとして忠実であるか、と言うことだ。

真宙が肉体的な成熟を迎えたとき。
その時、本当に女になってしまうのか、もしくはそのままなのか。
実際その時期にならないと分からない。
アルデイシアの純粋種なら、なって当然、当たり前だ。
地球人とのハーフであっても、まあ変わるだろう。
しかし、実際のところ真宙は１／１６くらいの混血具合なのだ。
真宙の母親、美宙は生まれたときも女であったため、性別は変わっていない。
祖父もそうだ。
彼も生まれたときから男だった。

真宙は自分も男として生きていくものだと思っていたので、アルデイシア人は肉体的に変わるときもあると知ってはいたが、いまいちわかっていない部分もある。
まじめに話を聞かなかったことが一番の原因だろう。
山田（こいつ）が自主トレに行ったら、母さんに電話を掛けようかな。
真宙はそう思い、ふと空を見上げた。

空は夕日に染まり、雲まで赤く染まっている。
「綺麗だな――」
真宙は思わず呟いた。

「ああ」
横を見ると清盛が真宙を見て微笑んでいた。
彼の顔も夕日に照らされて、赤く色づいている。

どきり。

真宙の鼓動が急に早くなった。

「か、帰るぞ。もう暗くなるし」
それを誤魔化す様に、真宙は清盛から視線を離すと、寮に向かって歩き始めた。

第二十五話

真宙は携帯を片手に部屋をうろうろしていた。

「なんだよ、電波悪いー」

どうやっても「圏外」か「アンテナ一本」程度にしかならず、真宙は渋い顔をした。

数分後、やっと電波が届くところを見つけたが、そこはお風呂場。清盛が帰ってきたら変に思うだろうな、と思いつつ真宙は電話を掛けた。

『はいは～い。宇野でーす』

電話の向こうの軽い口調は真宙の母親、美宙（みひろ）のものだ。

「……ちょっと、かーさん？

電話ぐらい普通に出ろよ。

俺だからまだいいけど、恥ずかしいだろ？」

真宙は苦笑いしながら美宙に言った。

彼女は自由奔放な人で、考えすぎな真宙とはいろんな意味で真逆なタイプだ。

二人を足して二で割れば、ちょうどいいくらいなのかもしれない。

『別にいーの。

美宙らしくていいんじゃない？　って真（まこと）さんに言われてるし』

真と言うのは、真宙の父親で彼は生粋の地球人である。

『それよりひろちゃん！！！

久しぶりじゃない～！！
お母さん寂しかったわ～。どう？　寮の生活って大変じゃない？？
今度のGWは帰ってくるんでしょ？
お父さんと楽しみにしてるんだから、絶対帰ってきてね！
そうそう。
さっきお向かいの遼（りょう）くんに会ったんだけど、
背丈もこの前より伸びててねえ～。
ほんと男の子って成長が早いわね。
そのときひろちゃんの話になって……。
あ、真さんが帰ってきたわ。
じゃあねひろちゃん。
また電話してね～！！　』

電話は母親の一方的な話で終わってしまった。

「……い、意味ねえ」

真宙は落胆し、ため息をつく。
（だから、かあさんってちょっと苦手なんだよな）

結局真宙が聞きたかったアルディシアについての話は全く聞けなかった。

（まあ、かあさんに聞いても、答えが出るってわけじゃないのかもしれないけど）
仕方なくお風呂場から出てくると、ちょうど清盛が帰ってきたところだった。

「ただいま」
「お！　おかえり！　」

清盛は真宙の手元に目線を落とした。
携帯片手に風呂場から出てきた自分が少し恥ずかしくなり、
真宙は電波が届かなくて……と、清盛が聞いてもいないのにいいわけをした。

「俺のは……電波届くけどな」
清盛は自分の携帯のディスプレイをみて呟いた。
「え？　そうなの？
何処のヤツ？？　」

真宙は清盛の携帯を覗き込む。
「ほんとだ、全部たってるじゃん。
俺もそれに乗り換えようかなあ」

そう言って真宙は清盛を見た。

「――！！
ご、ごめん――！！　」

携帯に気をとられて、あと数センチで唇が触れそうになるくらい近づいていた。

慌てて真宙が離れると、清盛はちょっと残念っぽそうに
「なんだ、お前からキスするのかと思った」と呟いた。

「ば！　ばっかじゃねーの？！
だ、誰がそんなことするか！！！

このエロ！！　」

真宙は耳まで真っ赤にして、近くにあった枕を投げた。
ふわふわとしている枕はとても投げづらく、清盛の足元にふわりと落ちていった。

第二十六話

「あーあー、何だってんだよ……」

真宙は小さく呟くと、目を伏せて足元の砂利を靴のつま先で転がす。

五月の風はまだ少し肌寒く、真宙は両手を自分のポケットに入れて寒さをしのぐ。

『ＧＷには家に帰って来て』と母――美宙が言うので、連休早々に自宅に戻ってきた真宙だったが、呼び鈴を鳴らしても応答がない。買い物にでも行ったのかと玄関先で待っていたが、もうかれこれ一時間ほど経過してしまった。

「携帯くらい持ってろっての」

真宙は未だに携帯を持っていない母に悪態をつきつつ、ぼんやりと砂利を見つめた。

（――腹、減ったなぁ。なんか買ってこようかな……。でも、あんま金ねーしな……）

財布の中には千円。

これが真宙の今の全財産だ。

ＧＷ中なので、預金は下ろせない。どうせ家に帰るんだからと安易に考えすぎていたことを今更後悔する。

（家の鍵さえ忘れてこなきゃなぁ……）

一度は寮に戻ろうかと思ったのだが、如何せんお金が足りないのだ。

千円では寮から家まで往復できない。
その上食べ物を買うと片道分の料金すら払えなくなってしまう。
「……はぁ……」
真宙は仕方なく玄関先に座り込むと、減りすぎて少しきりきりと痛むおなかを騙しつつ携帯ゲームを始める。
暇つぶしにはもってこいのパズルゲームだが、真宙は全く集中できずに時計の針ばかりを気にしていた。

――どれくらい経っただろうか。
もうそろそろ夕方という頃になっても、美宙は帰ってこない。
「はっくしょんっ」
長い間外に居たせいで、真宙の体はすっかり冷え切ってしまった。
「なんで、帰ってこねーんだ！？」
体を少し震わせて真宙は誰に言うわけでもなく独り言を言った――はずだった。
「おばさんたち、温泉旅行だってよ？」
「へ？？？」
真宙は驚き、声のするほうを見る。
「ヒロは聞いてなかったのか？
なんか福引かなんかで当てたって聞いたけど？」
「り、リョウ？！」
「ヒロ。久しぶり」

リュウと呼ばれた男はやわらかく笑うと、真宙の手をとった。
「お前、どんだけ外に居たんだよ？手、氷みたいに冷たいじゃねーか。
――とりあえず、俺んちに来い」

第二十七話

手を引かれて連れてこられたのは、真宙の家の向かい――綾瀬家。
リョウこと―綾瀬（あやせ）　遼（りょう）は真宙の幼馴染であり、良き友人でもある。
つないだ手はそのままに、綾瀬は開いているほうの手でポケットを探り家の鍵を出す。

「あ、それ。使ってくれてたんだ」

鍵についているキーホルダーを見て、真宙は思わず嬉しくなった。
それは真宙が小学校のときの家庭科の時間に作ったキーホルダーで、当時流行っていたゲームキャラクターのマスコットが付いている。
「ああ」
綾瀬は短く答え鍵を開けた。

「お邪魔しまーす」

綾瀬の家は相変わらずきれいに片付けてある。

「お前の家来るの久々だけど、ほんときれいにしてるよなー」
真宙はリビングをぐるりと見渡すと、窓際に飾ってあった胡蝶蘭の香りを嗅ぐ。

「……お袋が掃除好きだからな。
ちょっとでも散らかすと鬼みたいに怒るから大変だよ。
ヒロだって知ってるだろ？　」

そう言いながら綾瀬は真宙に暖かいコーヒーを差し出す。

「さんきゅ」

小さく礼を言うと、真宙はコーヒーを一口飲んだ。

「う～っ！　あったけぇ！
やっぱ暖かい飲み物っていいなぁ～！
……あれ？　そういえばおばさんは？　買い物？　」

真宙はきょろきょろとあたりを見渡す。

「――旅行」

そう言うと綾瀬はクッキーの入った皿を真宙の前に置いた。

「旅行？　」

おなかの減っていた真宙はクッキーをさくりとかじる。

「そ、お前のお袋と一緒にな。
ペア二組ご招待だったからって」

「ペア二組ってことは……もしかして俺の両親とお前の両親が旅行に行ってんの？！　」

「まあ、そー言うこと。
明日には帰ってくるって言ってたけど」

「――マジかよ。
……ねえ、リョウ。いや、リョウ君、リョウ様！リョウ殿！！
今日俺をここに泊めて！　」

「い、いいけど」

真宙の勢いに負けて綾瀬は少したじろいだ。
「よかったー！　そうだ！
お礼に飯作ってやるよ！
何がいい？
卵焼きか？　生卵か？　卵かけご飯か？　」
「つか、お前玉子焼き以外は料理と呼べないだろ！　」
綾瀬は苦笑いしながら真宙の頭をぽんと触った。
「うっ！
だって俺……あんま料理とかしたことねーし……」
真宙は口を尖らせて反論する。
「――いいよ」
「え？　」
「俺が作ってやるから、ヒロはその間風呂にでも入って来い。
結構長い間外に居たんだろ？
温まって来い」
でも……と言いかける真宙をさっさと脱衣所まで連れて行く。
着替えを真宙に渡すと、綾瀬は「ちゃんと肩までつかるんだぞ」と
子供に言い聞かせるようにして脱衣所を後にした。
「――なんだよ、俺子供じゃねーっつーのっ！　」
ぶつぶつと文句を言いながら真宙は服を脱ぐ。

（でも、ま。ほんとのこと言うと、まだ寒かったんだよな……）
手桶にお湯を汲みながら真宙は、やっぱ友達っていいなと思っていた。

第二十八話

「すっげーいい匂いがするんだけど！」

風呂から上がった真宙は満面の笑みを浮かべながら、まるで子犬か子猫のように綾瀬にまとわり付く。

「リョウって料理上手だったんだ。
すっげー以外！　やっぱおばさんに料理習ったの？
おばさん、料理上手だもんなあ！」

そういいながら綾瀬の目の前でひょいとから揚げをつまみ口に入れた。

「めちゃ旨！」

そして真宙はもうひとつつまみ食いをしようとしたが、これは綾瀬によって止められた。

「こらこら。行儀悪いぞ。
もう少しで出来るから、お前はテーブルでも拭いておけ」

ほら、と差し出されたのは薄いピンク色の台拭き。花の刺繍が控えめにあしらわれている。

真宙は「ちぇーっ」と呟くと、ダイニングテーブルを拭きはじめた。

綾瀬は一通りの準備を終えると、先ほど真宙が拭いたテーブルに料理を並べていく。

二人で食べるにはちょっと多いくらいのおかずが瞬く間にセッティングされた。

「じゃあ、食べようか」
「うん！　いただきますっ！　」
言うが早いか。真宙はまるで獣のように料理を平らげていく。

「――よっぽど、腹が減ってたんだな」
綾瀬はくすりと笑うと、真宙の頬についたご飯粒をぱくりと食べる。
「しょうがねーじゃん。
俺、今日は朝食くらいしかまともに食ってなかったんだし！
――あ、リョウの分まで食べちゃって、ごめんな？　」
少しだけすまなそうに謝る友人を前に、綾瀬は柔らかく微笑んだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おい、ヒロ。
起きろよ、ヒロ。
布団の用意できたぞ？　」
綾瀬が自室に真宙の布団を準備してリビングに戻ってくると、そこにはクッションを抱えて幸せそうに寝ている友人の姿があった。
「――ん、いや。もう食べれないし……」
真宙は寝ぼけているのか見当違いの返事をすると、すぐにまた寝息を立て始める。
「寝るんなら布団で寝ろよなー……」
綾瀬は真宙が抱えているクッションをそっとはずすと、抱きかかえて自室へと向かった。

真宙を布団に横たわらせると、風邪を引かないように布団を被せる。
そして綾瀬は彼の寝顔を見つめた。
「なんか――雰囲気変わった気がするな……」
具体的に何処が違うとは言えないまでも、何かが違う気がする――。
綾瀬はベッドに腰を下ろすと、ポケットから鍵を取り出しキーホルダーを眺めた。

第二十九話

真宙と綾瀬は小学校2年生からの付き合いである。
当初は家が向かいにある、というくらいにしか接点は無かった。
友達になったきっかけ。それは宇宙人騒動の辺りからだ。
真宙は小学生時代からずば抜けてきれいな容姿をしていた。
笑うととてもかわいらしく、ただいるだけで絵になるのだが、言葉遣いや行動はまさしく少年そのものであり、そのギャップも真宙の魅力になっていた。
ある日、いつも太陽みたいに笑っている真宙がしょんぼりしていた。
気になっていると、すぐに噂が流れはじめた。
「マー君って宇宙人なんだって」
その噂は瞬く間に広がっていった。
「だからあんなにきれいな顔してるのね」
「宇宙人ってたこみたいなヤツだろ？　大きくなるとああなるのかな？　」
「血の色が緑ってほんと？？　」
本当にどうでもいい言葉が飛んだ。
そして――気持ち悪いよね――と、子供たちは口にするようになった。

担任の先生が噂に気が付き事態を収拾してくれた――表向きには、だが。

子供は時として残酷なものだ。

自分より劣るもの、何かが違うものがあると本能的に攻撃する帰来がある。

きれいでかわいい真宙はいつしか『自分たちとは異なる異者（もの）』として認識されてしまっていたのだ。

「やめろよ。オレにかまうなよ！」

学校帰り、綾瀬は聞き覚えのある声に周囲を見渡した。

「お前本当に男なのかよ？　女みてーな顔して。

それより、大きくなったらタコみたいになるってマジ？」

上級生三人に取り囲まれているのは、小柄な真宙だ。

やけに馴れ馴れしく上級生の一人は真宙の肩を掴んでいる。

「そんな訳あるかよ！

お前、頭おかしーんじゃねぇの？！」

頭ひとつ分ほど大きい上級生相手に、真宙は噛み付きそうな勢いだ。

「なんだとっ！　生意気だなっ」

肩を掴んでいた上級生がどんっと真宙を突き放した。

バランスを崩した真宙は道路に投げ出される。
そのはずみでランドセルから教科書などが飛び出し、あたりに散らばった。

「なにやってんだよ」
綾瀬は真宙と上級生の間に立ち、一瞥すると道路に散らばっている真宙の荷物を拾い集める。

「――おい。もう行こうぜ――」
上級生三人は罰が悪そうにその場をあとにした。

「はい。宇野君」
「あ、ありがと」
綾瀬が荷物を渡すと、真宙は少し驚いたようなはにかんだ笑顔を見せた。
「宇野君？　ひじと膝のとこ、血が出てる」
「あ、ほんとだ」
転んだときにすりむいたのだろう、擦れて血が滲んでいた。
「俺、絆創膏持ってるから……とりあえずそこの公園で傷洗おう？」

「綾瀬。オレのこと、気持ち悪くないの？」
公園のベンチに座り、綾瀬に絆創膏を貼ってもらっていた真宙はぽつりと言った。
「なんで？」

「なんでって……お前も知ってるんだろ？
オレの噂のこと……」
真宙はうつむき、抑揚もなく呟く。
「別に俺、噂なんて気にしないけど？
宇野君は宇野君だろ？
……先生も言ってたじゃん？　俺たち全員宇宙人だって。
だから――気にすんなよ」
綾瀬はにかっと笑った。
真宙も少しなみだ目になりながらふわりと笑う。

それから程なくして彼らは親友になった。

キーホルダーはその時から数年後の家庭科の時間に真宙が作ったもので『親友の証』と裏にローマ字で小さく書いてある。
――今はかすれていて、読み取ることもままならないが。

第三十話

「うぅ～ん」

微かな声を聞いて綾瀬は真宙の方を振り向いた。
見ると真宙は布団を跳ね除けて変な格好になっている。

「――何やってんだか」

綾瀬はそう言うと真宙の姿勢を元に戻し、布団を被せたのだがすぐに布団を蹴り飛ばされてしまう。
「風邪引くぞ？」
やれやれと首を少し振りながら、綾瀬は布団をあきらめ、タオルケットをそっと被せてやる。
すると真宙はもぞもぞとタオルケットに包まった。

「……」
何気なく綾瀬は真宙の前髪をふわりと撫でる。
さらさらの髪の毛が綾瀬の指に触れ、するりと離れた。
その指を頬の辺りまで滑らせ、そのまま真宙の唇に触れる。

「……」

柔らかな唇に魅了されてしまったのか、綾瀬は指で何度かなぞると、しげしげと真宙を見つめていた。

「……ヒロ……」

呟くように名前を呼ぶと、綾瀬はまるで吸い込まれるようかのよ

うに真宙の唇に近づく。
その時だった。
真宙は少し呻くと自分の頬に触れていた綾瀬の手を離してゆっくりと寝がえりを打った。
綾瀬ははっとして自分の唇をきゅっと噛みしめる。
「俺……」
部屋は規則正しい真宙の寝息だけが静かに響いていた。

「あぁ～っ！　良く寝た！　」
柔らかな朝の日差しを浴びて真宙は起き上がった。
真宙はうーんと背伸びをすると、まだベッドで寝ている綾瀬に気が付く。
「リョウおはよー」
声をかけるも、彼は目を覚まさない。
実は彼は先ほどやっと眠りについたばかりなのだ。
しかしそんな事全く知らない真宙は布団をめくってみたり、くすぐってみたりと彼を起こそうと躍起になっている。
「よ～し」
真宙はにやりと悪戯っぽい笑みを浮かべると、勢い良く綾瀬に向かってダイブした。

「ぐっ！！　」
流石の綾瀬もコレにはたまらず苦しそうな声を上げて目を覚ます。
「なっ？！」
「おはよーリョウ！　」
にっこりと真宙は綾瀬に乗ったまま笑顔を見せる。
彼の顔との距離はわずか数センチだ。
「へ？　ヒロ？？　」

綾瀬は昨日のことを思い出し、顔を真っ赤にした。
「あ、苦しかった？！　ご、ごめんっ」
真宙は勘違いをして慌てて体を離した。

第三十一話

「なぁなぁ。これからどうする？　」
真宙は綾瀬が作った朝食をパクリと食べながら言う。
「あぁ、どうしようか」
綾瀬はサラダをフォークで刺しながら真宙の顔を見ずに答えた。

「俺さ。見たい映画あるんだよねー」
にやりと笑い真宙は綾瀬の顔を覗き込む。
「ねぇリョウ？　一緒に見に行こうよぉ～。お前のおごりでさぁ」
「お前、それが目的なんだろ」
じろりと真宙の事を見る綾瀬。
真宙はネコのようなくるりとした目で彼を見つめる。
「だって俺、いま金ほとんどないもん」
ちょっと高めの甘い声はまるで鈴の音のような心地よい響きを醸し出した。
「威張るようなことかよ」
綾瀬はふぅとため息をつくと今回は特別だぞと言った。

「やった～！　あの映画今日で最終日なんだよね。
ＤＶＤになるまでちょっと待ちきれないしさぁ」

ニコニコと笑いながら話す真宙は普段よりも一層かわいらしく見えて、綾瀬は自分の特別な感情を悟られまいと冷静を装うのに必死だった。

「お客様、生憎普通席は空きがない状態でございます」
チケット売り場の女性はすまなそうにそう言った。
連休中という事もあり、映画館はいつにもまして盛況していたので当然といえば当然の結果だ。
「――ですが、特別席ならまだ空きがございますがいかがいたしますか？」
「特別席？　ですか？　」
「特別と言ってもそれほどお値段は変わりません、ただ――」
「じゃあそれでお願いします！」
説明も終わらぬうちに真宙は横から声をかけた。
売り場の女性は綾瀬と真宙の顔を見てにこりと笑い「では特別席で」と言うとチケットを手渡した。

「お前なぁ、ちゃんと話くらい聞けよな」
綾瀬は座席を確認するとじっとりとした目で真宙を見た。
「えー。だって今日で最終だし、あんまり値段も変わんないし、どんな席で見たって別に俺は気にしないけど？」
そう言うと真宙は座席に座り、先ほど綾瀬に買ってもらったキャラメルポップコーンを口に放り込んだ。
「ってか、リョウだってそんな気にするタイプじゃないだろ？
まぁ――名前がちょっと『カップル席』ってのは気になるけどさ。
あ、ポップコーン食う？　」
真宙はしぶしぶ席に着いた綾瀬にポップコーンを進める。
でっかいバケツみたいな入れ物に溢れんばかりに入っていたポップコーンはいつの間にか１／４ほどなくなっていた。
「甘すぎるのはそんなに好きじゃないんだけどな」
そう言うと綾瀬はポップコーンをつまんで口に入れた。
口の中にキャラメル独特の味が広がる。

甘ったるい味に綾瀬は思わず顔をしかめた。

「リョウはあんま好きじゃないのか――。
じゃあ俺が全部食っていい??
初めてキャラメル味食べたけど、これすげーうまいしっ！」

そう言うと真宙はなんとも幸せそうにキャラメルポップコーンを口いっぱいに頬張った。

第三十二話

真宙が見たいと言っていた映画は『純愛ラブロマンス』ではなく『痛快アクションコメディー』である。
当日の初回と言う事を抜きにしても、おおよそカップルがデートで見るような映画ではなく、そのためカップルシートが余っていたのだろう。

「リョウ、リョウ」
小声で真宙が囁いた。
「なんだよ？　」
「俺らだけじゃないじゃん。男同士でカップル席の奴」
横を見ると確かに体格の良い男が二人カップルシートに座っている。
「シートの名前なんてやっぱどうでもいいんじゃね？
この映画すげー楽しいんだってよ？　前評判が良くてさぁ――　」

真宙の言葉を遮るように映画館の中は暗闇に包まれ、すぐスクリーンにこの映画館のマスコットキャラクターの『エイガンくん』と『シアーちゃん』がスクリーンいっぱいに現れて映画館内での注意事項を面白おかしく説明し始めた。
綾瀬がふと横を見ると、何故かその説明に真剣に見入っている真宙がいた。
あまりにも熱心にスクリーンにかぶりついているその姿を見て、口角が緩むのを感じる。
――ヒロには言わないでおこう――

綾瀬は先ほど真宙が言っていた『他のカップルシートの客』を横目で見ながら思う。
真宙の角度からは見えなかったんだろうが、綾瀬の位置からは男同士で手をつないでいるのが偶然にも見えていたのだ。
彼らは多分本物の『カップル』なのだろう。

映画はテンポよく進み、１時間４０分があっと言う間に終わってしまった。
「あー、面白かった！　」
真宙は明るくなった映画館でうーんと背伸びをする。
あれだけあったポップコーンは既に空になっており、綾瀬はクスリと笑う。

「なぁ、せっかくなんだしもっとどっか行きたいんだけど。
……でも、俺金ねーしなぁ。
ねぇ？　リョウ……」
ちょっと上目遣いに綾瀬を見る真宙。

傍目からみると、ちょっとボーイッシュな言葉遣いの美少女が彼氏に甘えているようにしか見えない。そのせいか、映画を見終え出口へ向かっている客たちのちらちらと視線を感じた。

「どこかって？　」
綾瀬はそんな真宙の顔をまじまじと見る。
――やっぱり何か雰囲気が変わった気がする――
そう思っていると真宙は満面の笑顔で「遊園地に行きたい！　」と元気よく答えた。

第三十三話

「遊園地？　」
「うん。ほら去年出来た遊園地！
俺ら受験だったから、終わったら行こうっていってたじゃんっ」
「あぁ、あそこか」
「……だめ？　かな？　」

綾瀬は真宙の頭をぽんと撫でると「絶叫系乗るぞっ！　」と言った。

去年オープンしたばかりの真新しい遊園地には『世界のバンジージャンプ』や『本物続出っ！お化け屋敷』『超巨大！日本一の観覧車？！』『１０分間ノンストップ！絶叫マシーン～君はGに出会えるか？！～』などなどギャグで作ったような看板が所狭しと掲げられている。

「わ～、すげ～」
真宙は感嘆の声を上げると早く入ろうと綾瀬の手を取って入場ゲートをくぐった。

「おめでとうございま～～～っすっ！！！」
突然現れた怪しげなピエロと遊園地マスコットキャラクターのアソ・ボッチが真宙と綾瀬の前に躍り出る。
「えっ？　な、なに？？！」
急に鳴り響くファンファーレ。

「あなたさま～方は、御来場５００００００ペア目ぇでござ～いま～すっ！！」
怪しげなピエロは変な口調で説明する。
アソ・ボッチは大きなリアクションでピエロの説明に頷くと真宙たちの周りを楽しそうに踊りだした。
「さぁ～さ、あそこにあるテレ～ビキャメ～ラ～に向かってコメントぉ～どうぞっ！！」
真宙はマイクを急に渡されて状況が全くつかめないまま「あ、ありがとうございます」とコメントする。
すると――パチパチパチパチ！　あちこちから拍手が聞こえてきた。
気がつけば遊園地の職員や遊びに来ていたお客さんたちに囲まれている。
「そし～ってこのヒモひっぱって～！　はいっ！！」
ピエロは綾瀬に白いひもを手渡す。
戸惑っているとピエロはどすの効いた声で『早く引け！みんな待ってるから』と囁く。そのコミカルな出で立ちとは真逆の態度に、綾瀬は慌ててひもを引っ張った。

「おめでとぉ～～～～～！！！」
くす玉が割れ、キラキラの紙吹雪が舞い「祝☆５００００００ペア！！」という垂れ幕が勢いよく飛び出てきた。

「さぁ～さっ！　お二人はこちら～にどうぞぉ～～～っ！」

ピエロとアソ・ボッチに手を引かれ、特設のステージのようなところに連れて行かれると、ずいぶんときらびやかな衣装を身にまとった中年のおじさんがニコニコとしながら二人を出迎える。

「あなたたちは私どもの遊園地、開園から数えて実に５０万人目の

ペアです。
そこでその記念として、乗物乗り放題パス1年間無料券をあなたたちにプレゼントしたいと思います。
えーっと、名前は何かな？　」
　おじさんはそう言うと真宙と綾瀬の顔を見た。
「宇野真宙……です」
「綾瀬遼……」
　アソ・ボッチからマイクを向けられて、二人は良く分らずに名前を告げる。

「では改めて！　」
おじさんはこほんと一つ咳払いをすると、カメラに向かってこう続けた。

「真宙さん、遼さん！これからもこの遊園地をたくさん利用してくださいね！
1年間無料パスをどうぞっ！！
そして今日あなた達にはこちらで用意した衣装に着替えていただいて、記念撮影などをしていただきたいんですがどうでしょう？　」

「えっ？　」
真宙たちが躊躇しているとピエロは握手をしながらこっそり「謝礼付きだぜ？」と言う。
　ピエロが低い声で真宙に囁くと、真宙はきらりと目を輝かせた。
「謝礼って？　お金？　」
「そう。ちょっとしたバイトだよ。
着替えて写真撮ってここで遊ぶだけで貰えるんだから楽なもんだろ？　」
真宙は綾瀬を見て『いい？』と小声で聞く。
こくりと頷く綾瀬を見て、真宙はにっこりと笑うと

「よろしくお願いします！　」とおじさんに返事をした。

第三十四話

「そんなの俺聞いてねぇっ！　」
真宙はたくさんの衣装がある部屋でピエロに文句を言った。

「それは仕方ないだろ。今さらだし。
仕事だと思って割り切ってやれよ。俺だって割り切ってやってんだからな」
　ピエロは腕を組んで真宙とにらみ合っている。

「ど、どうしたんだい？
なんだかトラブルだって聞いたんだけど……」
どたどたとやってきたのはあのきらびやかな衣装のおじさんだ。

「園長。こいつ、衣装を着ないって言うんですよ」
やれやれと言った口調でピエロは真宙を見る。
「どうしたんだね？　さっきはとってもやる気だったじゃないか……」
園長は困り顔でズボンからハンカチを取り出し汗を拭く。

「だって、衣装って……。
なんで俺がドレスなんて着ないといけないんですか」
「へ……」
園長は目を丸くしてピエロを見た。
「こいつ、オトコなんです」
ピエロはため息交じりに答える。

「オトコ、男っ！

う〜〜〜〜〜〜ん……。
でも、もう宣伝もしちゃったし、ポスターもあるし、遊園地のパンフレットだって……」
園長は真宙の顔を見ながらうなりを上げた。
「お前、仕事と思って割り切れ。
それにこのまま衣装に着替えないと違約金取られるぞ」
「い、違約金?!」
「そりゃそうだろ。ここまで大々的に５０万人目のペアだって言っておいていまさら辞退できると思ってんの?幸いペアっつっても『異性のペア』って言ってないことだし、お前が衣装着てここで遊べば丸く収まる。そのうえ謝礼も出るんだぜ?
どうすんだ?違約金渡すか、謝礼貰うか。二つに一つだけど?」
真宙は「衣装着ます……」と悔しそうに呟いた。
「おし。解った」そう言うとピエロは女性スタッフのところに真宙を連れていく。
「終わったら呼んでくれ」
そう言うと彼は衣装部屋を後にした。

第三十五話

「じゃあ始めましょうか！　」
「それにしてもお肌きれー！　」
「私たちがかわいくしてあげるからね～！　」

真宙はスタッフの女性に囲まれ、顔やら髪やらを触られる。

「ドレスは……これと、あとウイッグも必要か。ちょっとショートすぎるし。
あ、笹田さん、ドレスに似合う靴と装飾品よろしく」
彼女たちは固まっている真宙をよそにてきぱきと衣装の用意をし始めた。
一通りの準備が終わり「じゃあ始めましょうか」と言うやいなや真宙の服のボタンをはずし始める。

「そ、それくらい俺がやるからっ！」
真っ赤になってシャツのボタンを押さえる。

「そう？　お姉さんは全然オッケーなんだけどなぁ。
じゃあさ、このドレスに着替えてね。で、終わったら声かけて」

そう言うと仕切り代わりのカーテンをさっと引き女性たちはさっきのピエロについて話し始める。
「やっぱりさー、かっこいいのに何でピエロなんだろって思わない？　」
「思う思うっ！　だって、王子様役の小高くんよりカッコイイよねぇ」
「そうそう！　あ、かっこいいって言えば真宙ちゃんの彼氏の遼君

！　彼もいいよね～」

「あ、あの……。遼は幼馴染だし。俺男なんですけど」

真宙がカーテン越しにそう言うと女性スタッフたちはからからと笑った。

「そこは敢えて触れちゃダメなのに～」

「いえ！　そこがあるから萌えなんですって！」

「ま、似合えばどっちでもいいのよ」

彼女たちの勝手な意見に真宙は閉口する。

真宙はまるで自分の母が3人に増えたような感覚に少しめまいを覚えた。

「……あの、着替え終わりましたけど……」

真宙はそう言ってカーテンを開けた。

「はいはい～。

じゃあ、時間も押してるからガンガン行くわよぉ～！

はい！ここ座って！」

スタッフはそう言うと真宙にメイクを施した。

普段メイクなど全くしない真宙にはどうしていいのか解らず、「目を閉じて！！」「口を少し開いて！」などの命令にただ従うだけだ。

そのうち彼女たちの手も止まり、ようやく「真宙ちゃんお疲れ！」との声を聞き真宙は思わず小さくため息をついた。

「ねぇ！　見てみて！　すっごくかわいくなったわよっ！　」
スタッフのうちの一人が真宙を大きな鏡の前に連れていく。
「げっ！　これ、俺？！　」
真宙の目の前に姿を現したのは白いドレスを着た美しい少女が立っていたのだ。
「こらこら！　そんな恰好で『俺』とかいわないの」
「俺……やっぱりやめたい。……こんな恥ずかしい恰好で遊んでなんかられないよ……」
真宙は恥ずかしさのあまり消え入りそうな声で言う。
「大丈夫大丈夫っ！　私たちが羨むくらい綺麗になったんだから！　」

第３６話

「遅いぞ。まだか？　」
おもむろに扉が開いたかと思うと、先ほどのピエロが顔を出した。
「あ、お疲れ様です。
今終わったんですよ。ほら」
「あの、俺……」
真宙は顔を紅潮させながらスカートをきゅっと握った。
「――終わったんなら行くぞ」
そう言って真宙の腕をつかむとピエロは早足で歩きだした。
「ちょ、ちょっとまってっ――っ！！」
初めて履いたヒールの高い靴に翻弄され、真宙はピエロめがけて派手に転ぶ。
「なっ！　なんだよお前っ！　」
真宙はピエロの胸に飛び込む形となった。
「だ、だって俺、こんな靴履いたことないしっ！
なんかバランスとれねぇってっ！！　」
「……」
「……あの、でも、ごめん……」
「……そうか」
そう言うとピエロはそのまま真宙を支えつつ、近くにあった椅子

へと座らせる。

「……足、大丈夫か？」

そう言うとピエロはひざまづき真宙の足を取る。

「……大丈夫……です」

「靴。変えてもらわないとなぁ」

そう言うとピエロはヒールを脱がし、女性スタッフに指示を出した。

第三十七話

「これ以上ヒールの低いやつはない見たいだけど、大丈夫か？　」
「……ゆっくり歩けば、なんとか」
　ピエロに少し支えてもらい、真宙はゆっくりと歩き出す。
「――痛かったら言えよ？　一応これでも悪かったと思ってるんだからな」
「あ、ありがとうございます。……えっと、ピエロさん」
真宙はピエロの意外に優しい一面を知り、思わずほほ笑む。

「ヒロ？！」
先に写真を撮っていた綾瀬と合流すると、彼は驚いた表情を見せた。
「……笑いたければ笑えよ……」
真宙は綾瀬を上目遣いに睨む。
白いドレスに身を包んだ真宙は、まるで本当のお姫様のように綺麗だった。
「いや……まさかそう来るとは思ってなかったから――」
着替えが別々だったので、今までの経緯を全く知らない綾瀬はその場で立ち尽くす。
　二人の間に何となく重苦しい雰囲気が立ち込めた。
「ま、そんなに気にするなよ。
一応園長には謝礼を奮発して貰えるように頼んどいたし。
撮影もそんなに掛からないと思うから。
あ、一応言っとくけどこの撮影のコンセプトは『六月の花嫁』だそうだ」
ピエロはそう言うと少し意地悪く笑った。

「じゃあそこにある木馬の前で撮るよ～」
カメラマンはそう言うと真宙と綾瀬を木馬の前に移動させる。
そのあとも二人は細かい指示を出されて、色んなポーズを要求された。

「ヒロ……大丈夫か？」
小声でそう聞くと真宙は小さく頷く。
「そっちこそ……俺重くない？」
「これくらい大丈夫だ」
綾瀬の腕の中に居る純白の花嫁――真宙は恥ずかしそうに少し困った顔をした。

「あー、二人とも！　もっと愛をこめて見つめ合ってー！」
カメラマンが二人に指示を出す。
後ワンポーズで終わりと聞き、やれやれと思っていた二人に課せられたポーズはなんと
『御姫様だっこで熱く見つめ合う二人』という微妙なものであった。

「お疲れさんー！
いやぁ、いい絵が撮れたわ！」
カメラマンは満足そうにうんうんと頷く。

「お疲れ。
カメラマンも最高にいい出来だってさ」
そう言いながらピエロは真宙と綾瀬にペットボトルを渡した。

第三十八話

「あー肩こった！」
真宙はそう言うと腕をぐるぐると回した。
「それにしても真宙がドレス着るとは思わなかったな」
くくくっと笑う綾瀬に真宙は少し顔を赤らめる。
「そ、それは誰にも言うなよ？！
特に母さん！　何言われるかわかったもんじゃないし！」
真宙はちょっと膨れて綾瀬の顔を見上げる。
綾瀬は返事の代わりに真宙の頭に軽く触れた。
遊園地からの帰り道。夕日が彼らの影を伸ばし、優しい風に乗ってカレーの香りがふわりと鼻先をくすぐる。

「あ、結構貰ったからリョウに今日おごってもらった分返すよ」
真宙はそう言ってかばんに手をかけようとしたその時、綾瀬が真宙の手をつかむ。
「――遼？」

「別にいいよ。
俺も謝礼貰ったし、それにヒロが一番大変だったろ？
足、大丈夫か？」
「あ、うん。平気……ってかなんで足の事知ってんの？」

「あぁ。真宙がメイクを落としてる時、あのピエロが『お前が足ひねったから気をつけてやれ』って。
きつかったら言えよ？　もし歩けないようならおぶってやるから」

「あ、ありがと」

繋いだ手とつながる影を見て、真宙は綾瀬の優しさになんだかくすぐったさを覚える。

そして――清盛のときとはまた別の――特別な感情が芽生え始めていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6858j/

宇宙と恋のあいだ。

2011年2月2日16時40分発行